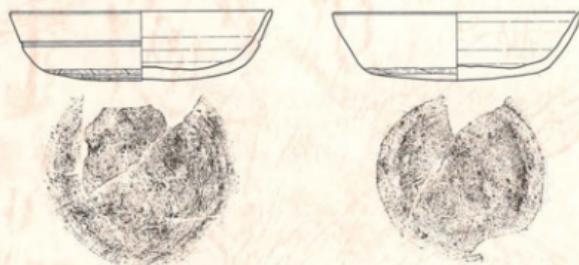


白石市文化財調査報告書第34集

八幡坂遺跡ほか発掘調査報告書



5号窯跡出土須恵器

平成21年8月

白石市城南第二土地区画整理組合
白石市教育委員会

例　　言

1. 本書は白石市城南第二土地区画整理整埋事業に係る発掘調査報告書である。発掘調査及び調査報告書刊行に係る経費は白石市城南第二土地区画整理組合が負担した。
2. 土層の色調表記については、『新版標準土色帖』を用いた。
3. 検出遺構の略号は以下の通りである。

S R : 窟跡 S I : 壴穴住居跡 S D : 溝跡 S K : 土坑 P : 柱穴

4. 本報告書の作成は、図版作成が主として宮城県教育庁文化財保護課、本文執筆は菅原祥夫、清野俊太朗、日下和寿があたり、日下が編集した。執筆分担は次のとおりである。第4章及び第5章1～6の(4)までは菅原祥夫、第1章、第3章は清野俊太朗、その他は日下である。
5. 報告書作成等にあたっては、宮城県教育庁文化財保護課をはじめとする次の機関・個人から協力をいただいた（敬称略）。

土師器、須恵器 石本 弘（白石市文化財保護委員）、佐藤敏幸（宮城県考古学会々員）

近世陶磁器 佐藤 洋（仙台市教育委員会）、八重樫忠郎（岩手県平泉町役場）

羽柴直人（財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

6. 現地調査及び資料整理に指導いただいた故中橋彰吾白石市文化財保護委員長、故高橋辰男委員に哀悼の意を表する。

7. 発掘調査成果の一部については、『昭和62年度 宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨』に掲載されているが、本書の内容が優先する。

8. 第1図は国土地理院の2万5千分の1白石、大河原、白石東部、白石南西部を複製して使用した。第3図は白石市土地情報提供GISを使用した。

9. 本事業の調査記録及び出土品は、白石市教育委員会生涯学習課が保管しており、依頼に応じて公開している。

調査要項

- 1 遺跡名称 確認調査 八幡坂遺跡（遺跡番号02442）、八幡坂西陣屋跡（02249）、
八幡坂西遺跡（02345）、前山遺跡（02115）事前調査 八幡坂遺跡
- 2 遺跡所在地 白石市大平森合字八幡坂地内
- 3 調査主体 白石市城南第二土地区画整理組合
白石市教育委員会
- 4 調査担当 白石市教育委員会社会教育係
- 5 調査員 白石市教育委員会 清野俊太朗
白石市文化財保護委員 中橋彰吾
タ 高橋辰男
元福岡小学校教諭 後藤利喜郎
- 6 調査指導 宮城県教育庁文化財保護課
- 7 調査協力 宮城県教育庁文化財保護課
仙台育英学園高等学校教諭 渡辺泰伸
仙台市博物館 田中則和
仙台市立宮城野小学校 山田 稔
白石市文化財保護委員 佐々木敏雄
仙台市博物館 佐々木和博（所属、役職名は調査当時）
- 作業員 高橋喜久寿、高沼秋雄、大野勝男、阿部 直、広田ハル、斎藤丈夫、
日下秀樹、最上修一、日下和寿
- 8 調査期間 確認調査 昭和62年2月24日～3月29日
事前調査 昭和62年8月24日～10月
- 9 調査面積 確認調査 801m²
事前調査約 5,000m²

第1章 調査に至る経過

白石市第二城南土地区画整理組合設立準備会から当該地における土地区画整理の計画が白石市教育委員会に提示されたのは昭和61年4月であった。

その後、白石市役所では都市計画課が窓口になり、関係各課と協議を重ねた。市教育委員会は同時に県教育庁文化財保護課に概要を報告し、その取り扱いについて種々協議をしてきた。

その結果、当該区画整理地内に遺跡が存在することから、昭和62年2月から3月にかけて確認調査を実施することになった。対象は八幡坂遺跡、八幡坂西陣屋跡、八幡坂西遺跡、前山遺跡であった。

上記のうち八幡坂遺跡では、須恵器の窯跡が5基発見された。八幡坂西陣屋跡、八幡坂西遺跡では、ごく少量の遺物が出土したが、遺構はなく、事前の発掘調査は実施しなかった。前山遺跡は、既に宅地造成のため、削平を受けていたが、それ以外の範囲にも遺構が伸びることを予想して確認調査を実施したが、遺構は発見されなかった。

市教育委員会では係る確認調査の結果をもとに県教育庁文化財保護課及び白石市第二城南土地区画整理組合設立準備会と更に協議を行い、区画整理組合の正式な発足を待って八幡坂遺跡の発掘調査委託契約を締結し、県教育庁文化財保護課の指導、協力を得て昭和62年8月に発掘調査を開始した。同10月に現地における発掘調査を完了した。現地説明会は10月3日に開催した。

第2章 八幡坂遺跡周辺の遺跡と環境

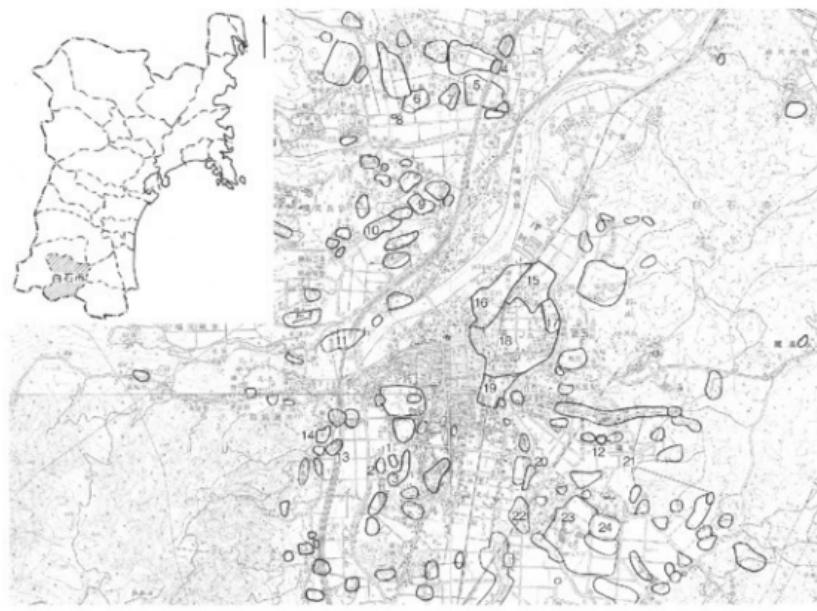
八幡坂遺跡周辺の丘陵上、いわいる傑山寺の背後の丘陵には遺跡が多い。今回の土地区画整理事業地内には八幡坂遺跡、八幡坂西遺跡、八幡坂西陣屋跡、前山遺跡がある。このうち八幡坂西遺跡と八幡坂西陣屋跡は同一地を指し、遺跡範囲も重複している。遺跡の種別は、前者が散布地、後者が伊達政宗による白石城攻めの陣屋跡として登録されている。

隣接する遺跡を含めた地区は戦後、片倉家第15代当主であった信光氏が詳細分布調査を実施している。その結果、古代の瓦、須恵器窯跡の存在が古くから指摘されていた地区であった（白石市史編さん委員会1976）。以下、窯跡を中心として周辺の遺跡を概観したい。

隣接する兀山遺跡の古代瓦の考察において（佐々木、菊地1985）、前山遺跡の須恵器窯について言及があった。兀山遺跡は平成18年5月に東北大学によって試掘調査が行われ、焼土、瓦片の出土が確認されている。

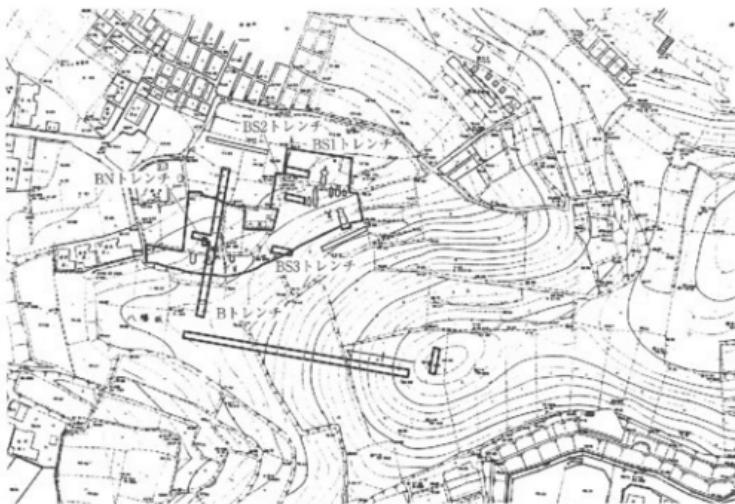
白石城本丸内には益岡遺跡があり、古代の散布地となっているが、八幡坂遺跡と本丸は同一丘陵であることから、古代の窯跡の存在を指摘する見解もある。

中世になると本遺跡から東へ5.4kmの位置に一本杉窯跡がある。周囲には東北、黒森、市ノ



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	八幡坂遺跡	空跡	古代	13	中野御伊野跡	跡地	近世
2	須原跡、須原御跡	散布地、墓壙群	古代、近世	14	月心院遺跡	散布地、寺院	古代、近世
3	熊山遺跡	散布地、墓壙	古代	15	佐陀内遺跡	散布地	弥生～平安
4	衛所内遺跡	集落	縄文早、中、後、平安	16	坪内遺跡	散布地	奈良、平安
5	青木遺跡	集落	奥文早、中、後、弥生、平安	17	綾台崎遺跡	集落	古墳後～平安
6	下館遺跡	散佈地、墓壙、雲出遺跡	縄文後、平安、中世	18	大畠遺跡	散布地、官衙	弥生～中世
7	造内塚遺跡	散布地、製铁遺跡	奈良、平安	19	本郷遺跡	散布地	古代
8	亞田廢寺跡	寺院	平安	20	鶴田遺跡	集落	弥生、古墳
9	下ノ神明山遺跡	散布地	縄文中、平安	21	施萬古墳群	前方後円墳、円墳	古墳、古代
10	田上遺跡	散布地	縄文前、中	22	谷津川遺跡	散布地	縄文～古代
11	皆生田遺跡	集落	縄文前～後、弥生	23	白石金里郭墓羣完地	水川跡	古代、中世
12	鮮賀理吹遺跡	散布地	古墳時代	24	和佐堂遺跡	散布地	縄文後、古代

第1図



第2a図 発掘調査当時の地形図と発掘区 (S=1/2,500)

沢窯跡があるが、正式な発掘調査を実施しているのは、一本杉窯跡のみである。ここでは、13世紀後半頃に20基の窯が中世陶器生産を行っていた。甕、壺、攪鉢を主体として生産していた。

近世では3つの窯跡が知られている。北に1.5kmにある瓦焼場窯跡は瓦、陶器を生産していた（相原2000）。鍋石窯跡は北西1.9kmにあり、陶磁器が散布している。瓦の生産も指摘されている（相原2000）。萩の坂窯跡は3.4kmの位置にあり、陶磁器が生産されたと考えられている。

中世になると、近世白石城のある丘陵、兀山のある丘陵に城館が営まれるようになる。古くから片倉氏は、これらの丘陵を中世における白石城として捉えている（片倉1965）。

したがって八幡坂遺跡が所在する傑山寺丘陵は古代においては生産の場として利用され、中世～戦国期においては城館として利用されたことが窺える。

その他周辺の遺跡として、上鹿野遺跡、新館西遺跡などがあるが、発掘調査が実施されておらず、内容がよく分からぬ遺跡が多い。

関連資料と考えられるものは、写真図版13-7に示した。川原石に須恵器が溶着したもので、窯跡などでよく見られる窯焼台である。示したものは長さ16cm、幅16cm、厚さ5cmで、暗灰褐色を呈している。須恵器破片4点ほどが表裏面に融着している。昭和53年、市内の上西周次氏から寄贈を受けたものである。一緒に保管してあった紙片には斎川河川改修時に出土と記してあるが、上西氏は八幡坂遺跡及び前山遺跡周辺に土地を所有していたことから、この周辺における耕作中に出土した可能性が高いものである。

第3章 調査の方法と経過、資料整理

調査の対象地域は、北は市道八幡坂線、南は市道病院線、東は旧奥州街道、西は国道4号線に囲まれた丘陵で、面積は120,000m²である。

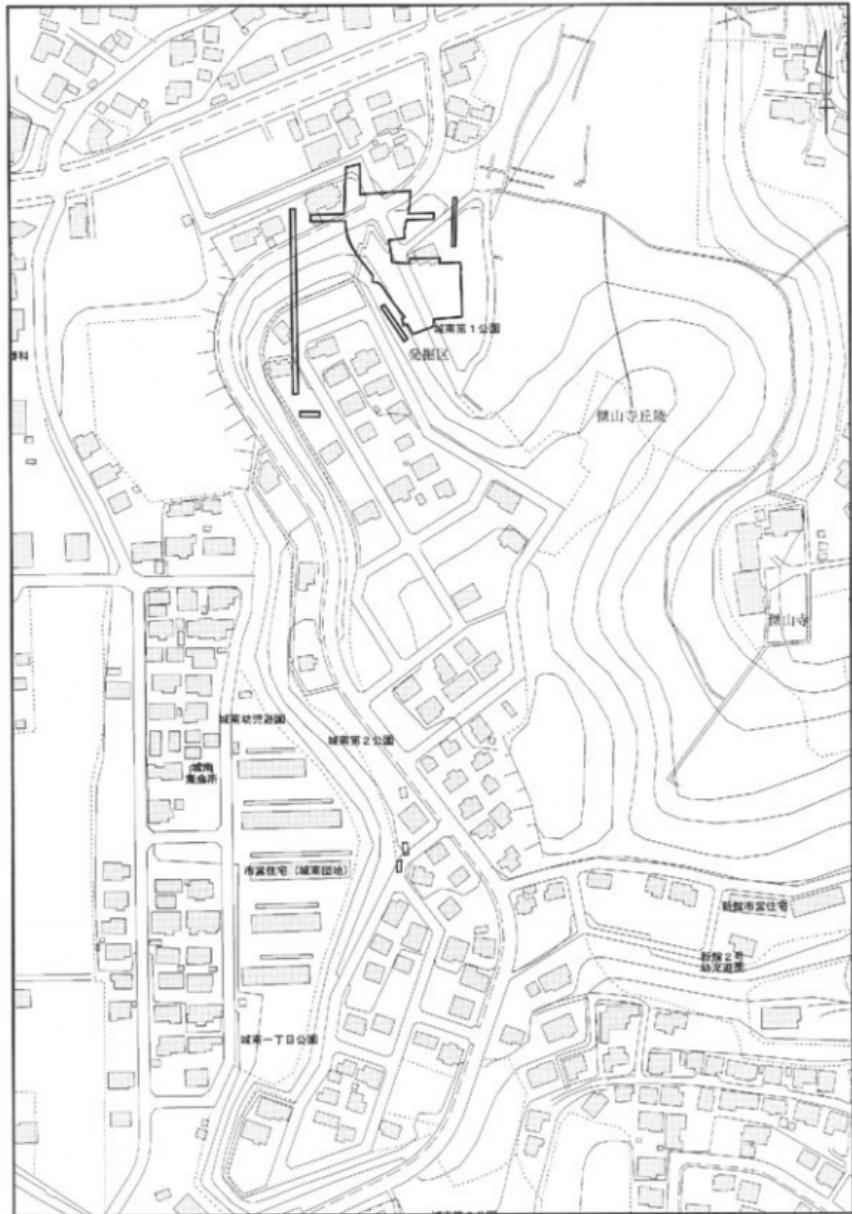
遺跡は丘陵北端に近い東斜面に立地しており、現況は畠地、荒蕪地である。8月24日に調査地内の除草を実施し、同27日から表土除去作業を開始した。遺構の確認作業は調査地域の北側から開始し、順に南側に移動して行った。浅い所では10cm、深い所では60cmで地山面に達した。調査区名はほぼ北半分を北調査区、南半分を南調査区とした。その結果、北調査区では窯跡4基、南調査区では同8基、並びにその他の遺構が検出された。引き続き遺構を精査し、実測図の作成や写真撮影を実施した。

実測図作成にあたっては、調査区内に20mごとの国家座標に基づく基準点No.7、No.8を使用した。各遺構の実測図作成は遺構の両端に任意の点を設定し、それと直交する任意の点を使用して行った。

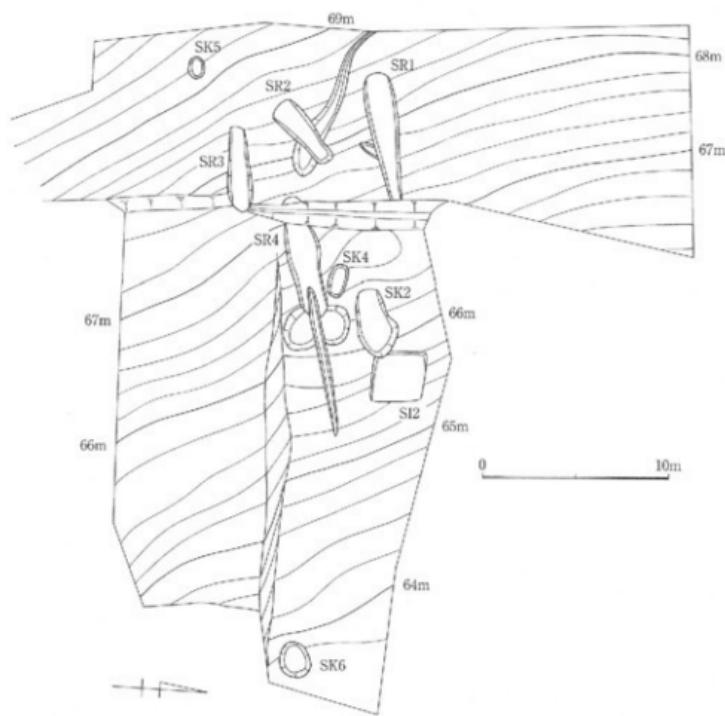
資料整理では土器の水洗い、注記、接合を行い、県文化財保護課に実測及び写真撮影作業の協力を仰いだ。



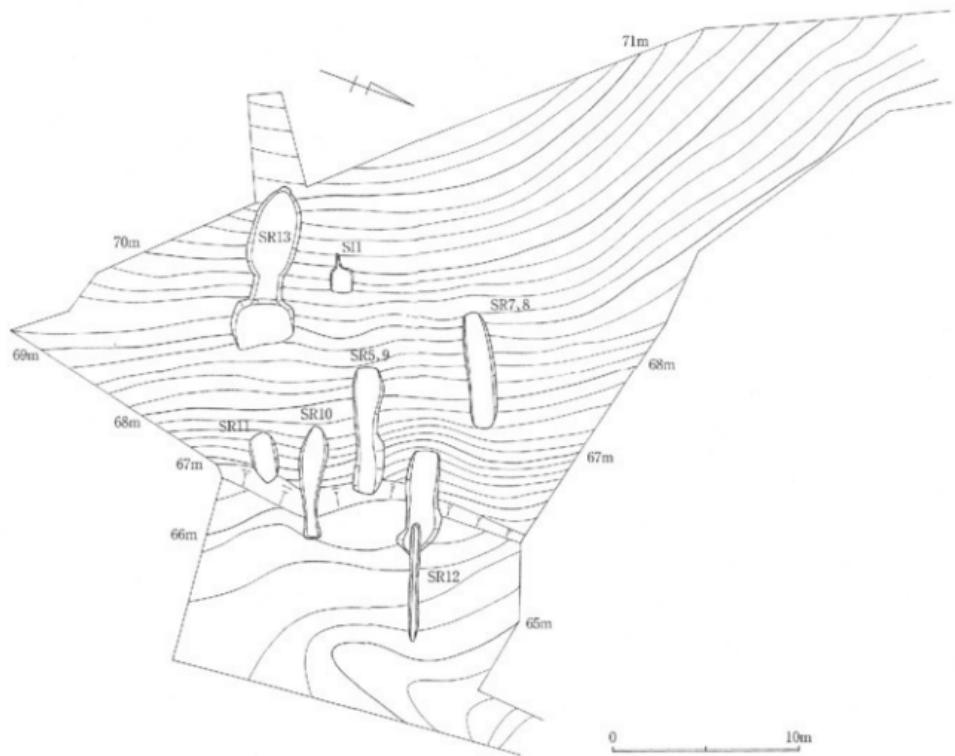
第2b図 遺構全体図 (S=1/2,500)



第3図 確認及び発掘調査位置図 (S = 1/3,000)



第4図 調査区位置図（北集中区）



第5図 調査区位置図（南集中区）

第4章 検出された遺構と遺物

この発掘調査によって、須恵器窯跡12基、竪穴住居跡2軒、土坑5基、土器埋設遺構1基が検出され、コンテナ約70箱分の遺物が出土した。それらは、白石盆地に浮かぶ、独立低丘陵（標山寺丘陵）の東向き斜面上に立地し、須恵器生産に関わる一連の遺構群と捉えられる。平面分布には、次の2つのグループが認められる（第4・5図）。

- ◎ 北集中区……1～4号窯跡、2号住居跡、1・2・4・5・6号土坑
- ◎ 南集中区……5、7～13号窯跡、1号住居跡、1号壙棺墓、

以下、順に沿って事実報告を行っていく。

なお、今回の報告は調査から既に20年近くが経過しており、いくつかの制約が伴った。一部の遺構は、原図・写真類が所在不明になり、構築位置、堆積土、被熱状態が確認できなかった。また掲載遺物は、当時の図版をそのまま使用したので、环偏重の選択基準となっている。その解決策として、補足図版は作成したが、時間の制約上わずかの追加にとどまった（第42～44図）。今日の研究水準からすれば、壙類の定量的な提示が必要であり、この点は、今後の課題としておきたい。

具体的記述を行うに先立って、これらの点をあらかじめ断つておく。

1. 須恵器窯跡

12基検出された。8世紀の地下式直立煙道窯（5・13号窯跡）と、9世紀の半地下式奥部開口窯（1～4、7～11号窯跡）に大別され、後者はほぼ窯尻まで確認できたのが、4・5・8・10・13号窯跡にとどまっている。

なお、このうち1号窯跡は、外周溝であることが判明した1号溝跡と一括で記述を行う。また、窯構造と細部名称は、望月精司（望月2004）の分類案に準拠する。

1号窯跡（+1号溝跡）

【位置・遺存状態】北集中区で検出された、標高68mの等高線上に横並びした3基の須恵器窯跡（1～3号）のうち、向かって右（北側）のものにあたる。窯尻は欠損していた。

【重複関係】外周溝（1号窯跡）が2号窯跡と重複し、これより新しい。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部、それに外周溝からなる半地下式窯である。

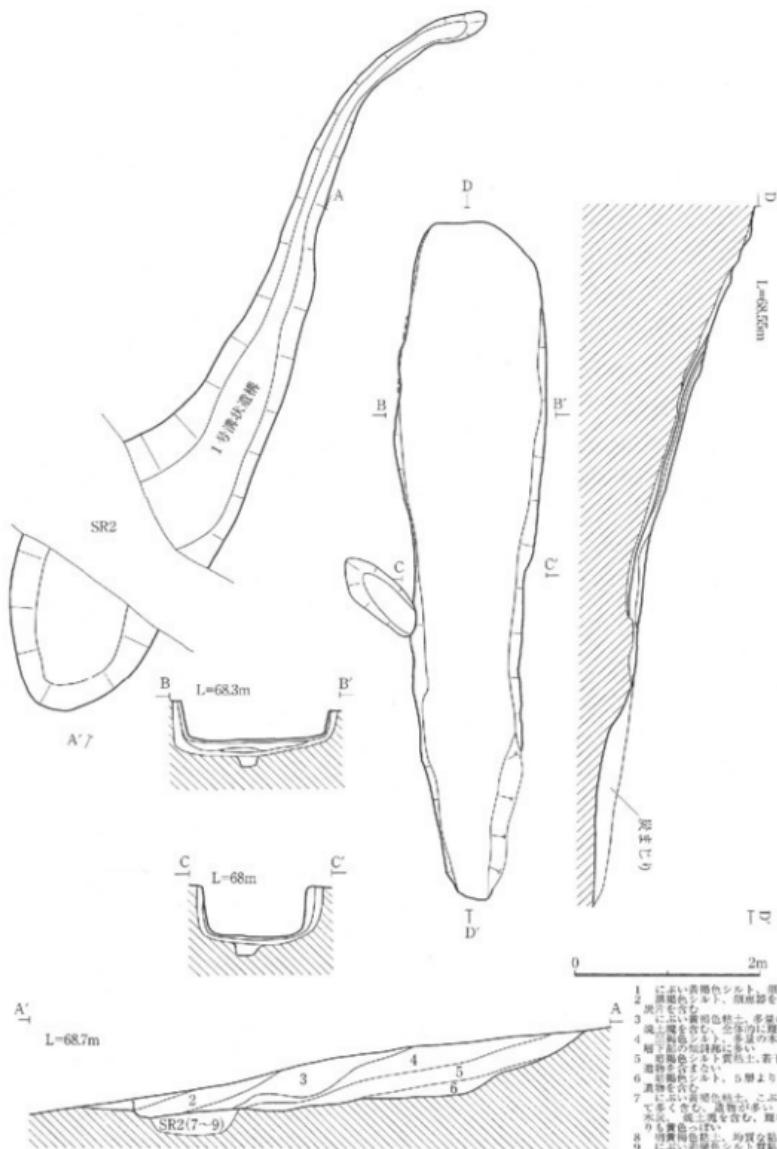
【遺存規模】全休……長さ7.31m以上（窯体5.18m以上）

焼成部…長さ3.78m以上 最大幅……1.52m 遺存高…0.54m

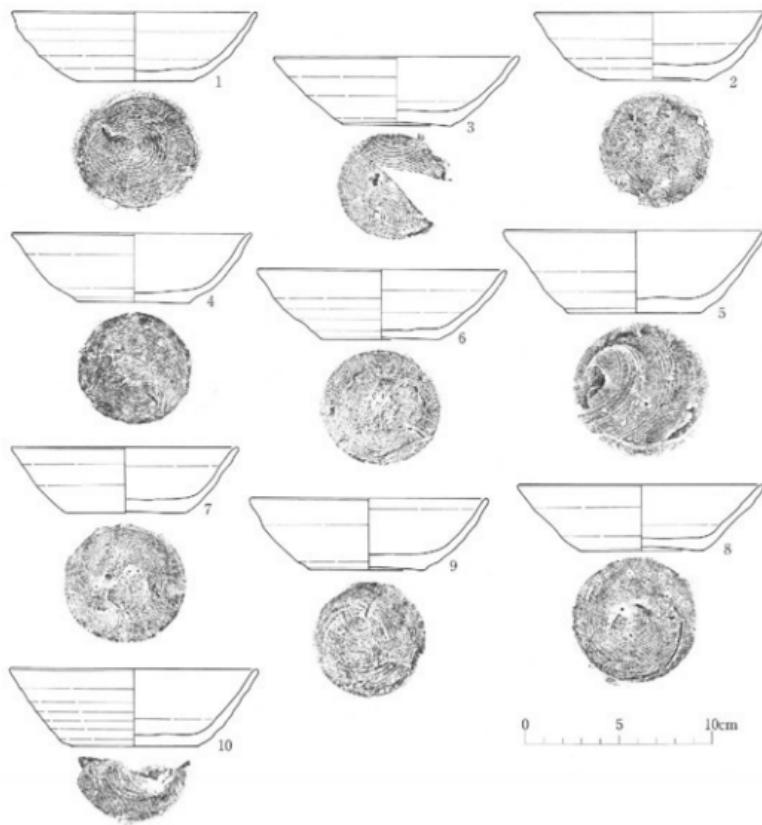
燃焼部…長さ1.40m 焼成部境幅…1.06m 焚口幅…0.90m 遺存高…0.56m

前庭部…長さ2.13m

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。



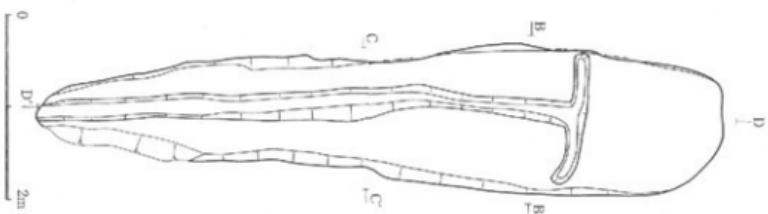
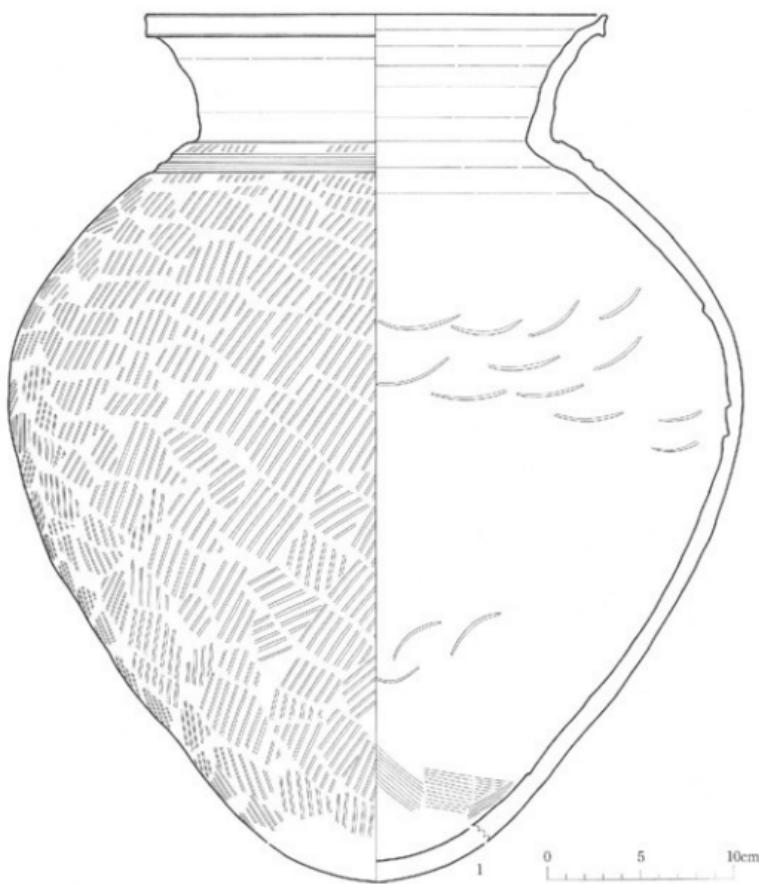
第6図 1号竜跡(1)と1号溝状遺構



1号窯跡、灰陶

番号	解 位	種 別	口径cm	底径cm	器高cm	登 錄	分 類	写真版
1	周溝	頸轂器环	(131)	6.2	3.8	1.2	C II c	
2	周溝	頸轂器环	12.6	6	3.6	1.3-8	C II c	6-3-2
3	周溝	頸轂器环	13.1	5.8	3.7	1.3-9	C II c	6-2-2
4	周溝	頸轂器环	12.8	6	3.8	1.3-3	C II c	6-1-2
5	周溝	頸轂器环	14.1	7.3	4.5	1.3-4	B II c	6-2-1
6	周溝	頸轂器环	13.4	6.3	3.8	1.3-5	C II c	6-3-1
7	周溝	頸轂器环	12.1	6.4	3.6	1.3-1	B II c	6-1-1
8	周溝	頸轂器环	(132)	6.5	3.6	1.3-6	C II c	
9	周溝	頸轂器环	12.8	6.2	3.9	1.3-2	C II c	
10	周溝	頸轂器环	(133)	(6.6)	4.2	1.3-7	B II c	

第7図 1号窯跡出土遺物(1)



1号罐跡

番号	場 位	性 別	口徑cm	底徑cm	高さcm	發 墓	分 類	写真図版
1	排水溝	須恵器壺	24.8	39.4	(46.7)	1.2		

第8図 1号窯跡出土遺物(2)と平面図

のことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、中膨らみ気味の形態をなす。床面は、部分的に3面認められ、還元→酸化している。傾斜は16°を測る。また、燃焼部境の左側壁に浅い窪みが認められる。110cm×42cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは、8~10cmを測る。

【燃焼部】平面形は、方形を呈し、燃焼部に対して緩やかにくびれる。床面は1面みられ、還元→酸化していた。傾斜は、3°を測る。

【床下溝】焼成部中程から窯体外に、「T」字型の暗渠排水が設けられている。溝幅20~31cm、深さ12~15cmを測り、上面は、礫を並べた蓋が架けられていた。

【前庭部】燃焼部と連続して構築され、縦長の平面形を有する。底面高は、手前に向かって次第に浅くなり、消失する。

【外周溝】窯体外の左側で検出された。平面形は、緩やかな「S」字状をなし、幅は斜面下に向かって幅広になる。最頂上部分は、排煙口付近に位置したと推定される。規模は、長さ8.86m、溝幅20~154cm、検出面からの深さ30~40cmを測る。機能は、送風装置、作業通路、排水溝を兼ね備えたと考えられる。

【出土遺物】須恵器壺10点、甕1点、こね鉢1点を図示した。このうち、須恵器壺とこね鉢は、外周溝（1号溝跡）からまとめて出土したものである。したがって、帰属関係にはやや不安はあるが、それらを含めて一応共伴資料とみておく。

須恵器壺（第7図1~10）器形は、壺形のもの（3・5・7・8・10）と、楕形のもの（1・2・4・6・9）がみられる。傾向としては、前者の方が口径／底径比が大きい。底部はすべて回転糸切り無調整である。

須恵器甕（第8図1）底部を欠いているが、丸底とみられる大型品である。頸部外面の直下に2条の沈線が巡り、胴部外面に平行叩き目、内面に當て目が観察される。

須恵器こね鉢（第43図4）外面に、多数の刺突が施された底部片である。

2号窯跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。標高68mの等高線上に横並びした3基の須恵器窯跡（1~3号）のうち、中間のものにあたる。窯尻は欠損していた。

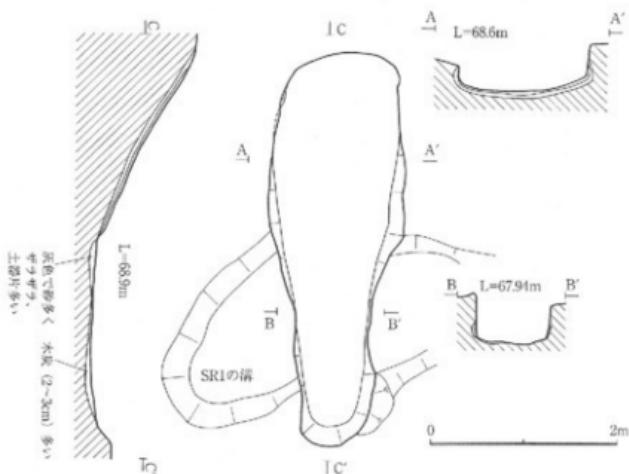
【重複関係】1号窯跡の外周溝（1号溝跡）と重複し、これより古い。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部からなる半地下式窯窯である。

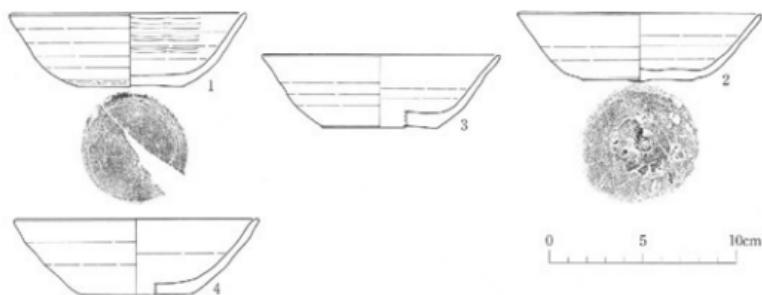
【遺存規模】全体……長さ4.20m以上（窯体3.07m）

焼成部…長さ2.20m以上 最大幅……1.36m 遺存高…0.55m

燃焼部…長さ0.87m 焼成部境幅…1.08m 焚口幅…0.72m 遺存高…0.50m



第9図 2号窯跡



2号窯跡

番号	層位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1	埋土	須恵器环	12.7	5.6	4 2-1	C a	6-4-1	
2	床面	須恵器环	13	6	3.6 2-4	C I c	6-5-1	
3	床面	須恵器环	12.7	6.3	3.9 2-2	B I e		
4	床面	須恵器环	13.1	6	4.1 2-3	C I c	6-4-2	

第10図 2号窯跡出土遺物

前庭部…長さ1.13m

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん幅広になり、窯尻に向かってすばまる。床面は、1面認められ、還元→酸化している。傾斜は 27° を測る。

【燃焼部】平面形は、燃焼部に対してもくびれ、焼成部境から手前に先細り気味に伸びる。床面は1面みられ、酸化している。傾斜は水平である。

【前庭部】燃焼部と連続して構築され、底面レベルも一致する。木炭層の堆積がみられた。

【出土遺物】土師器坏1点と須恵器坏3点を図示した。前者は遺構には伴っていない。

土師器坏（第10図1）埋土から出土した。器形は「楕形」を呈し、ロクロ調整されている。底部は、切り離し不明→回転ヘラケズリである。器形及び製作技術は土師器坏であるが、焼成は須恵質である。

須恵器坏（第10図2～4）いずれも床面から出土した。器形は、2が「楕形」、3・4が「坏形」と「楕形」の中間形態を呈する。2は、底部ヘラ切り無調整である。

3号窯跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。標高68mの等高線上に横並びした3基の須恵器窯跡（1～3号）のうち、向かって左側のものにあたる。窯尻は、欠損しているが、窯体幅の状況からみると、ほぼ原形を留めていると推定される。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる半地下式窯窓である。

【遺存規模】全体……長さ4.09m以上（窯体3.40m以上）

焼成部…長さ2.46m以上 最大幅……1.09m 遺存高…0.42m

燃焼部…長さ0.96m 焼成部境幅…0.83m 焚口幅…0.80m 遺存高…0.44m

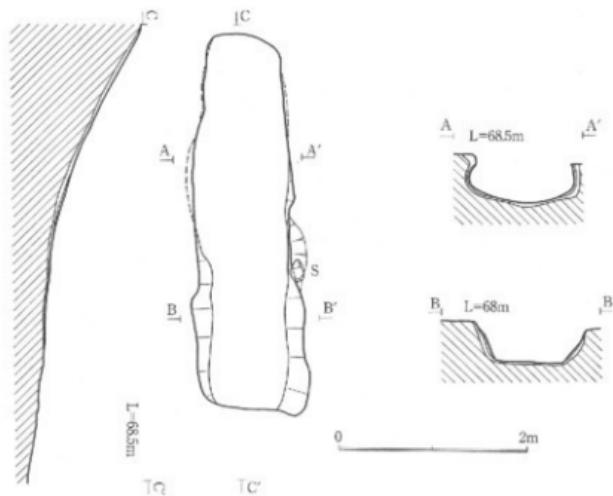
前庭部…長さ0.69m

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。このことから、奥部開口型と判断される。

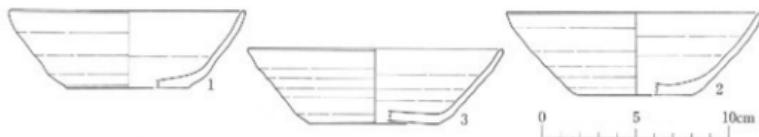
【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん幅広になり、窯尻に向かってすばまる。床面は、1面認められ、還元→酸化していた。傾斜は、焼成部境付近で 17° 、窯尻側で 26° を測る。

なお、焼成部境の右側壁から、蝶が1個検出されている。

【燃焼部】平面形は焼成部に対してもくびれ、同じ幅で手前に直線的に伸びる。床面は1面で、酸化し、傾斜は 6° である。



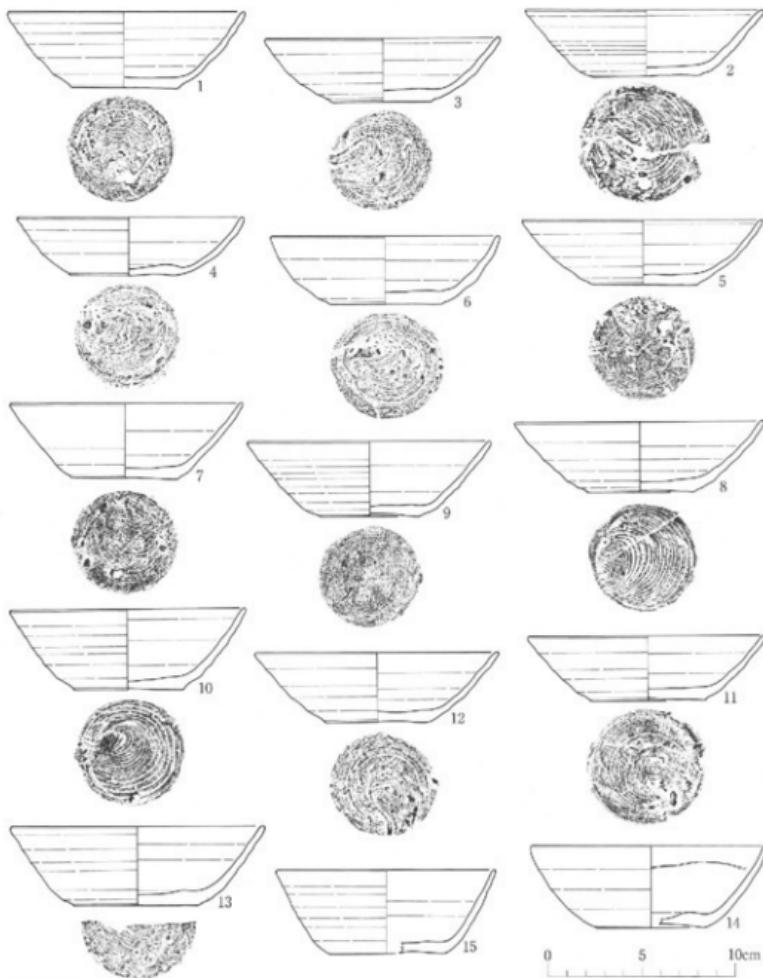
第11図 3号窓跡



3号窓跡(1)

番号	所位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1	床面	須恵器环	(12.6)	(6.4)	4.1	3-30	B II c	
2	床面	須恵器环	(13.1)	(5.7)	3.8	3-13	C II c	
3	埋土	須恵器环	(13.8)	(7.0)	4	3-33	B II c	

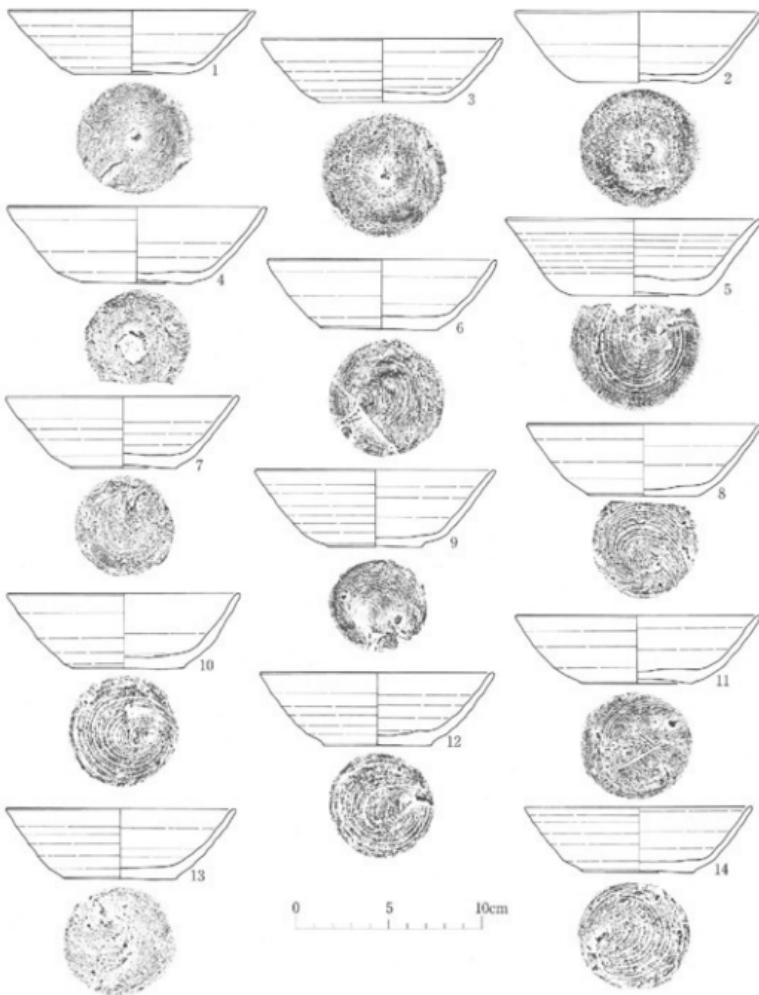
第12図 3号窓跡出土遺物(1)



3号墓跡(2)

番号	場所	種別	口径cm	底径cm	厚さcm	形状	分類	写真図版
1	床面	網漉器环	(12.6)	5.7	4.1	3-14	C II e	
2	床面	網漉器环	12.7	5.7	3.6	3-5	C II e	7-1-2
3	床面	網漉器环	12.6	5.6	3.4	3-7	C II e	7-2-1
4	床面	網漉器环	12.1	5.5	3.2	3-12	C II e	6-7-2
5	床面	網漉器环	(12.9)	5.7	3.5	3-8	C II e	
6	床面	網漉器环	12.4	6	3.7	3-10	C II e	7-4-2
7	床面	網漉器环	12.4	5.7	4	3-20	C II e	
8	床面	網漉器环	13.4	5.7	3.8	3-19	C II e	7-5-1
9	床面	網漉器环	13	5.4	4.1	3-17	C II e	9-7-2
10	床面	網漉器环	(12.6)	5.9	4.3	3-26	C II e	
11	床面	網漉器环	(12.7)	6.3	3.5	3-15	B II e	
12	床面	網漉器环	(13.1)	5.7	3.8	3-13	C II e	
13	壁上	網漉器环	13.5	6.6	4.2	3-32	C II e	7-2-2
14	床面	網漉器环	(12.6)	5.8	4.4	3-3	C II e	
15	床面	網漉器环	(11.8)	6.4	4.5	3-6	B II e	

第13図 3号墓跡出土遺物(2)



3号窯跡(3)

番号	層位	種別	口径cm	底径cm	高さcm	登録	分類	写真図版
1	床面	刷毛器环	13.2	6.4	3.4	3-22	C I c	7-3-1
2	床面	刷毛器环	(13.2)	6.5	3.8	3-25	C I c	
3	床面	刷毛器环	(13.)	6.8	3.4	3-24	B I c	
4	床面	刷毛器环	(13.9)	5.8	4.2	3-27	C I c	
5	床面	刷毛器环	13.7	7	4.2	3-28	B II c	7-4-1
6	床面	刷毛器环	(12.3)	6.3	3.8	3-21	B II e	
7	床面	刷毛器环	12.5	5.5	3.9	3-4	C II c	7-5-2
8	床面	刷毛器环	12.6	5.8	3.9	3-16	C II c	6-6-1
9	床面	刷毛器环	12.9	5.1	4.2	3-29	C II c	7-1-1
10	床面	刷毛器环	12.5	6.1	4.1	3-1	C II c	6-8-1
11	床面	刷毛器环	13.1	5.9	3.7	3-31	C II c	6-7-1
12	床面	刷毛器环	12.5	5.8	4	3-18	B II c	6-6-2
13	床面	刷毛器环	12.4	6.2	3.8	3-11	C II c	6-8-2
14	床面	刷毛器环	(12.3)	6	3.5	3-9	C II c	7-3-2

第14図 3号窯跡出土遺物(3)

【前庭部】燃焼部と連続して構築され、壁は自然傾斜に沿って消失する。なお、写真には右側壁と手前壁に疊の検出された様子が写っている。しかし、実測図には省かれており、原位置を移動したものと判断されたと思われる。

【出土遺物】須恵器壺32点を図示した。

須恵器壺（第12～14図） 第13図13、第12図3の他は、すべて床面出土の共伴資料である。器形は、第13図7・14・15、第14図1～5、第12図1～3が「壺形」、第13図3～5、第14図8～14が「椀形」に分類され、中間形態も存在する。この2タイプの底部を観察してみると、「壺形」は回転ヘラ切り無調整、「椀形」は回転糸切り無調整の多い傾向が指摘され、器形と製作技術の相関関係が窺える。

4号窯跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。前述した3基の須恵器窯跡（1～3号）の位置より標高の低い、66.0～67.0mラインに当たっている。周囲には、ほぼ同時期と考えられる2号住居跡、2号土坑のほか、1・4号土坑が認められる。窯尻まで検出され、長大な全体像が捉えられた。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる半地下式窯窯である。

【遺存規模】全體……長さ13.55m（窯体6.35m）

　焼成部…長さ4.40m　　最大幅……1.31m　　遺存高…0.46m

　燃焼部…長さ1.95m　　焼成部境幅…1.18m　　焚口幅…1.20m　　遺存高…0.63m

　前庭部…長さ7.20m

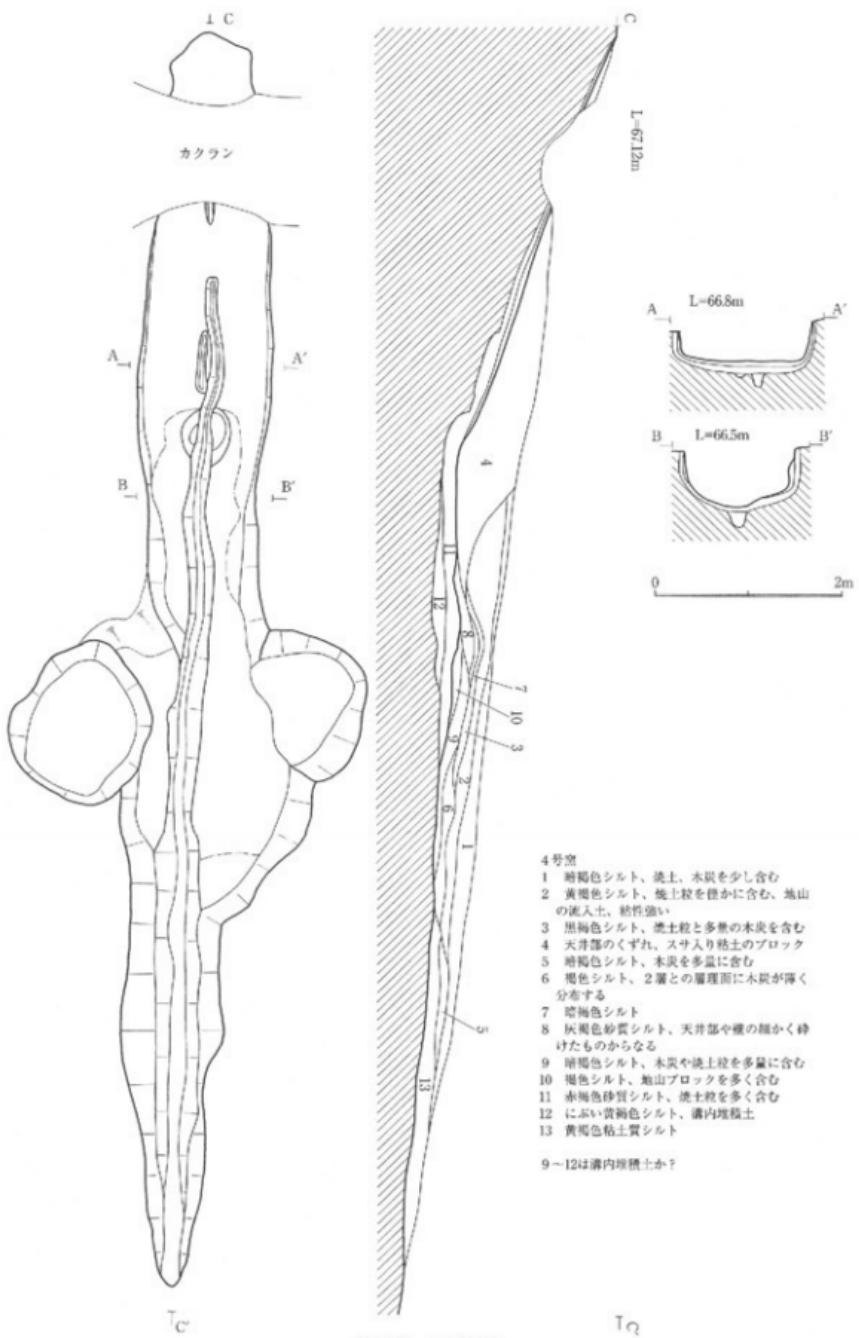
【煙道部】遺存部分でみると、底面は、奥壁まで焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいわん幅広気味になり、窯尻に向かってすばまる。床面は、1面認められ、還元→酸化していた。縦断面形は直線的に外傾し、傾斜は19°を測る。中軸線上には、窯体外に連続する暗渠排水溝が認められる

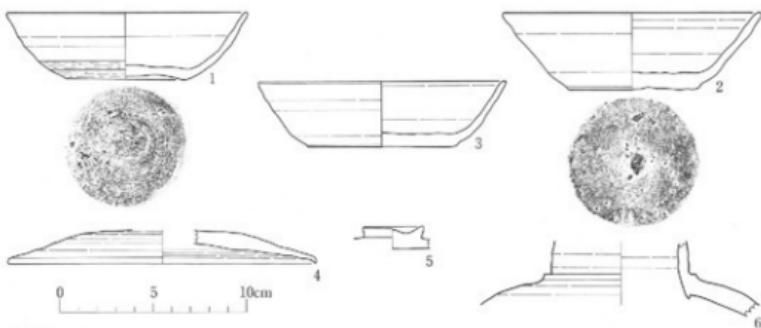
【燃焼部】焼成部境から、焼成部に対してややくびれ、同じ幅で手前に直線的に伸びる。床面は1面で、還元→酸化していた。傾斜は3°を測って、ほぼ水平に近く、焼成部との違いは明瞭である。

【前庭部】平面形は、焼成部より幅広で、内側壁に土坑状の落ち込みが伴う。また、中軸線上には窯体からの連続で、排水溝が直線的に伸びている。

【出土遺物】須恵器壺3点、蓋2点、長頸瓶1点を図示した。すべて床面共伴資料である。



第15図 4号窓跡



4号窯跡

番号	層位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1	床	須恵器坏	13	6.5	3.7 4-1		B a	
2	床	須恵器坏	14	7.1	4.1 4-2		B I c	7-6-1
3	床	須恵器盖	13.3	7.9	3.5 4-4		B I b	7-6-2
4	床	須恵器蓋	16.5			4-5		
5	床	須恵器蓋				4-3		
6	床	須恵器長颈瓶				4-6		

第16図 4号窯跡出土遺物

須恵器坏（第16図1～3）1は、体部下端に、底部から連続した回転ヘラケズリ調整を受けている。このため、底径は小さめである。切り離し技法は不明。2・3は、底径の大きめな「坏形」を呈している。底部は、回転ヘラ切り無調整である。

須恵器蓋（第16図4・5）4は、端部が短く折れ曲がる天井部、5はつぶれた宝珠型のつまみである。

須恵器長颈瓶（第16図6）頸部片であり、外面下端にリング状凹帯を有している。

5号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0～68.0mラインに横並びした7基（5、7～12号）の須恵器窯跡のうち、中央のものにあたる。この地点では、主軸を揃えて上下2基の須恵器窯が営まれているが、本窯跡は下層遺構である。そのため、上部構造は破壊されているものの、窯尻まで確認された。

【重複関係】9号窯跡と重複し、これより古い。

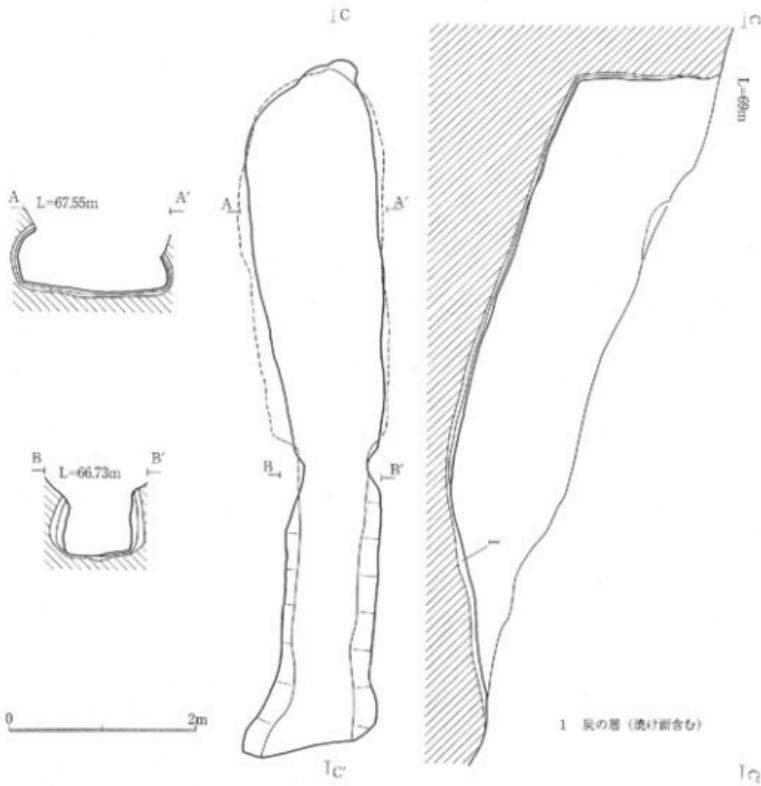
【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる地下式窯である。

【遺存規模】全体……長さ7.09m（窯体5.80m）

焼成部…長さ4.20m 最大幅……1.54m 遺存高…0.61m

燃焼部…長さ1.60m 焼成部境幅…0.74m 焚口幅…0.63m 遺存高…0.68m

前庭部…長さ1.29m

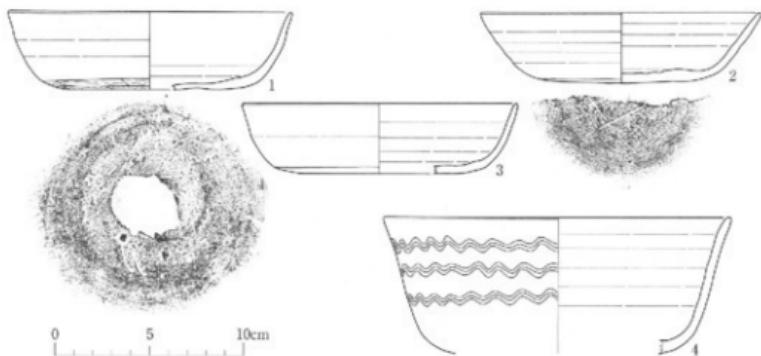


第17図 5号窓跡

【煙道部】直立煙道である。位置は、主軸から右へずれ、奥壁より突出している。遺存高152cmを測る。

【焼成部】平面形は、最大幅の位置が窓尻側にある点に特徴がみられ、奥壁は丸みを有する。床面は1面で、還元→酸化していた。縦断面形は直線的に外傾し、傾斜は 20° を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部に対して明瞭にくびれ、焼成部境は角張っている。床面は1面で、焚口に向かって傾斜し、還元→酸化している。傾斜は 12° を測る。



5号窯跡(1)

番号	器位	種別	口径cm	底径cm	形高cm	登録	分類	写真図版
1	堆上	須恵器坏	15	12	4.2	5-3	A 2 1 b	7-8-1
2	堆土	須恵器坏	(15)	8.8	3.8	5-17	A 2 1 b	8-6-1
3	焚き口床面	須恵器坏	(14.7)	(11.4)	3.8	5-14	A 2 1 b	
4	堆土	須恵器塊	18.7	9.5	(7.3)	5-8	A 2 1 b	8-2

第18図 5号窯跡出土遺物(1)

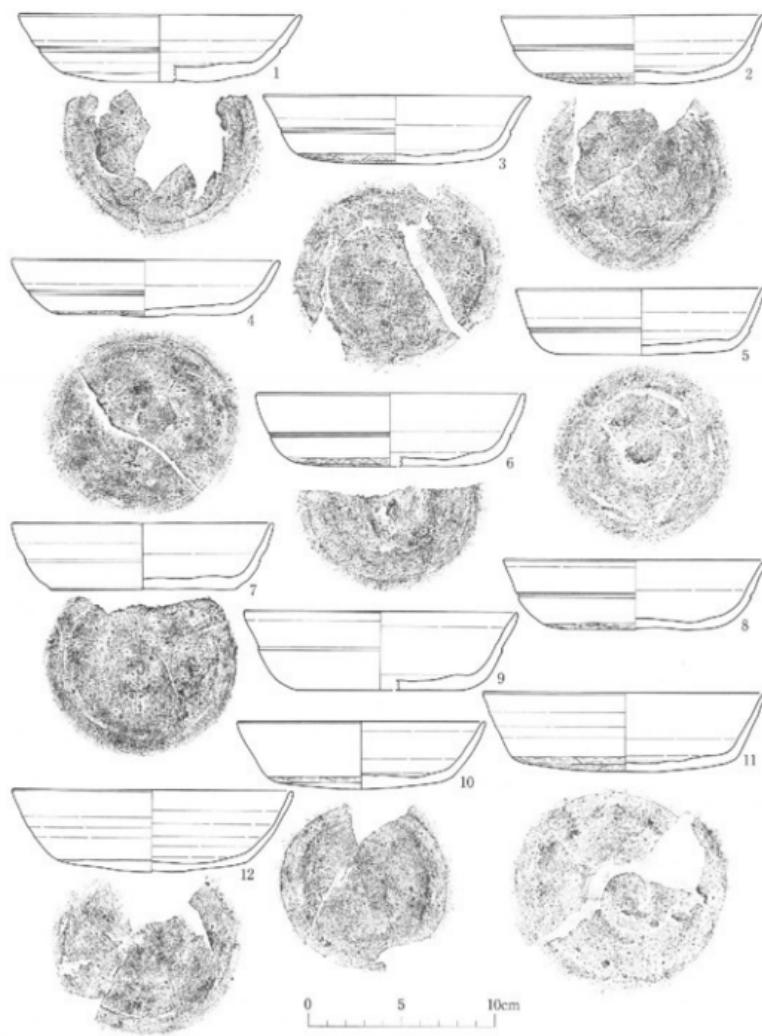
【前部】平面・縦断面形とともに、燃焼部の連続で地表とつながる。

【出土遺物】須恵器坏12点、塊2点、甕2点を図示した。

須恵器坏（第18図1～3、第19図）出土状況は、埋土・床面・焚口と一定していない。しかし、器形に齊一性があり、上層9号窯跡の製品とは明らかに特徴が違っている。このことから、広い意味での共伴資料と判断される。器形は、口径／底径比が大きく、細部特徴として、口縁部外面下端に沈線ないし段を有するタイプ（第19図1～9）と、無いタイプ（第18図1～3、第19図10～12）の2つがみられる。前者は調査当時、「土師器の有段丸底坏を模倣したもの」と話題を呼んだ資料群である。底部痕跡は、どちらも回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリで共通している。

須恵器塊（第18図4）埋土から出土した。口縁部外面に3段の波状文が巡る。

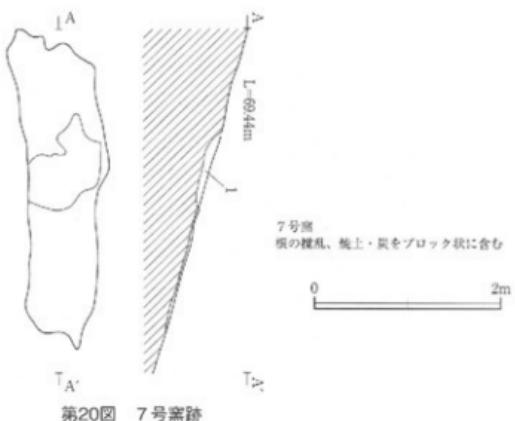
須恵器甕（第43図5・6）どちらも焚口底面から出土した、口縁部である。内外面に波状文が巡る点に、特徴がみられる。



5号窑跡(2)

番号	位置	種別	口径cm	底径cm	高さcm	登録	分類	写真図版
1	埋土	須恵器環	15	10.2	3.6	5-10	A11b	8-4-1
2	埋土	須恵器環	14	10.6	3.7	5-9	A11b	8-3-2
3	床面	須恵器環	14.3	9.5	3.7	5-2	A11b	7-7-2
4	埋土	須恵器環	14.2	9.5	3	5-4	A11b	7-8-2
5	埋土	須恵器環	13.4	9.3	3.5	5-1	A11b	7-7-1
6	焚き口	須恵器環	(14.4)	11.2	4	5-5	A11b	8-1-1
7	埋土	須恵器環	14	9.8	3.6	5-11	A11b	8-4-2
8	埋土	須恵器環	14	9.5	3.8	5-15	A11b	
9	焚口床面	須恵器環	14.6	9.3	4.3	5-6	A11b	8-1-2
10	埋土	須恵器環	13.4	10	3.7	5-13	A21b	8-5-2
11	焚口床面	須恵器環	15	12	4.3	5-7	A21b	8-3-1
12	埋土	須恵器環	(15)	10.2	4.4	5-12	A21b	8-5-1

第19図 5号窯跡出土遺物(2)



第20図 7号窯跡

7号窯跡

【位置・遺存状態】 南集中区で検出された。標高66.0~68.0mラインに横並びした7基（5、7~12号）の須恵器窯のうち、右端のものにあたる。この地点では、主軸を描えて上下2基の須恵器窯が営まれているが、本窯跡は上層遺構である。遺存状態は削平が著しい。

【重複関係】 8号窯跡と重複し、これより古い。

【窯体構造】 詳細不明。周辺地形から、半地下式とみられる。

【遺存規模】 全体……長さ3.34m以上（全体3.34m以上）

焼成部…窯体長に明記	最大幅………0.83m以上	遺存高…0.00m
------------	---------------	-----------

燃焼部…不明	焼成部境幅…不明	焚口幅…不明	遺存高…0.00m
--------	----------	--------	-----------

前庭部…不明

【煙道部】 不明

【焼成部】 検出されたのは、この部分と思われる。床面は1面認められ、酸化している。傾斜は20°を測る。

【燃焼部】 不明。

【前庭部】 不明。

【出土遺物】 なし。

8号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0～68.0mラインに横並びした7基（5、7～12号）の須恵器窯のうち、右端のものにあたる。この地点では、主軸を揃えて上下2基の須恵器窯が営まれているが、本窯跡は下層遺構である。遺存状態は、壁の立ち上がりがほとんど残っていなかった。しかし、上層7号窯跡の掘り込みが浅く、平面形は短冊状をなすほぼ全体像が捉えられている。

【重複関係】7号窯跡と重複し、これより新しい。

【窓体構造】煙道部、焼成部、燃焼部からなる半下式窯窓である。

【遺存規模】全体……長さ6.66m（窓体6.66m：焼成部・燃焼部の境界は不明瞭）

　焼成部…窓体長に明記　最大幅……1.20m　遺存高…0.12m

　燃焼部…窓体長に明記　焼成部境幅…不明　焚口幅…0.80m　遺存高…0.09m

　前庭部…なし？

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、やや先細り気味をなし、窓尻で丸くおさまる。床面は、窓尻付近で2面認められ、還元→酸化している。縦断面形は直線的に外傾し、傾斜は15°を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部とはほぼ同じ幅で連続し、他の窯跡のようにくびれない。ただし、焼成部境は、平面・断面とも不明瞭で、焼成部とスムーズに連続する。床面は1面で、還元→酸化している。傾斜は12°を測る。

【前庭部】斜面下端付近が相当するかも知れない。ただ、底面が酸化しているので、燃焼部との区別は判然としない。

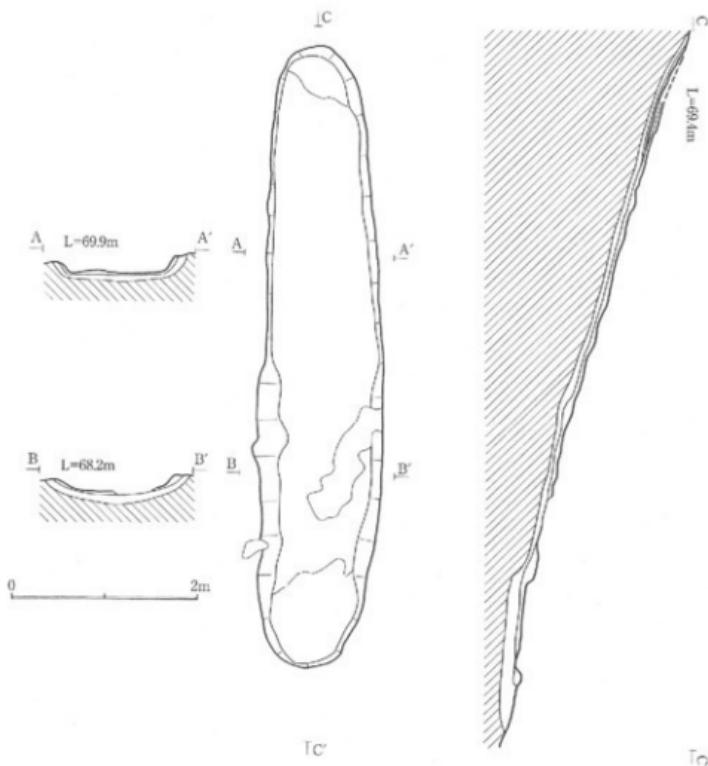
【出土遺物】須恵器高台杯1点、蓋1点を図示した。

須恵器高台杯（第22図1）床面から出土した。器形は、口径／底径比が大きく、口縁部が外反気味に開いている。底部はヘラ切り無調整である。

須恵器蓋（第22図2）埋土から出土した。器形は、口縁部端が短く折れ曲がる。1とセットになる可能性があると思われる。

第9号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0～68.0mラインに横並びした7基（5、7～12号）の須恵器窯跡のうち、中間のものにあたる。この地点では、主軸を揃えて上下2基の須恵器窯が営まれており、本窯跡は上層遺構である。遺存状態は、窓尻が残っていなかった。また、燃焼部下端は新旧関係を誤認し、下層の5号窯跡を先に掘り込んでいたため、調査でき



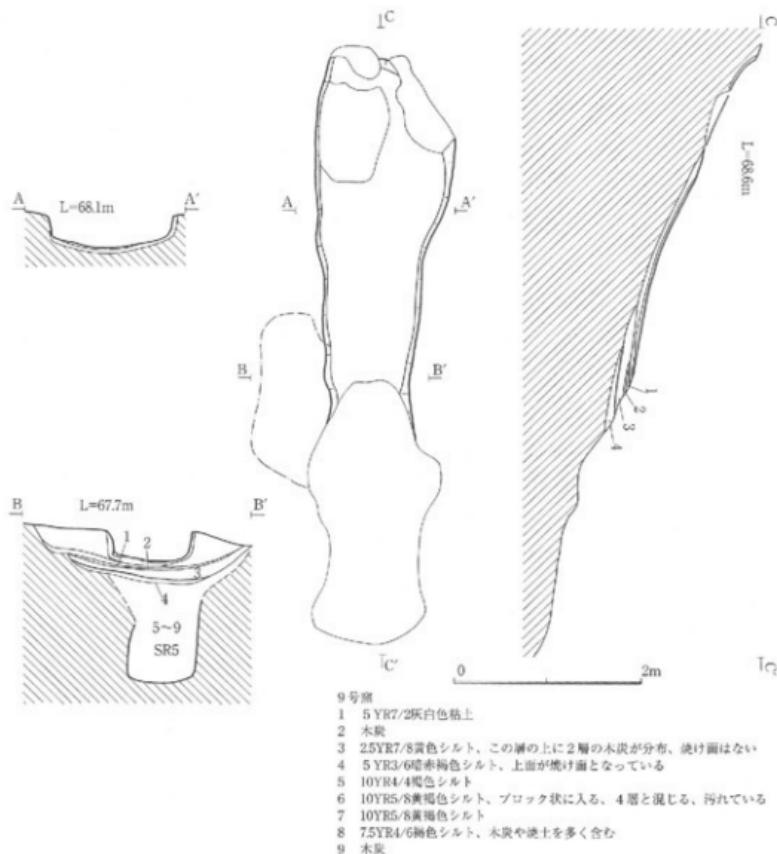
第21図 8号窯跡



8号窯跡

番号	層位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1	高台付环	(15.8)	10.7	3.8	8-1			8-7-1
2	釜	(15.8)			8-2			

第22図 8号窯跡出土遺物



第23図 9号窯跡

ていない。

【重複関係】 5号窯跡と重複し、これより新しい。

【窯体構造】 煙道部、焼成部、燃焼部からなる半下式窯である。

【遺存規模】 全体……長さ3.75m（窯体3.75m以上）

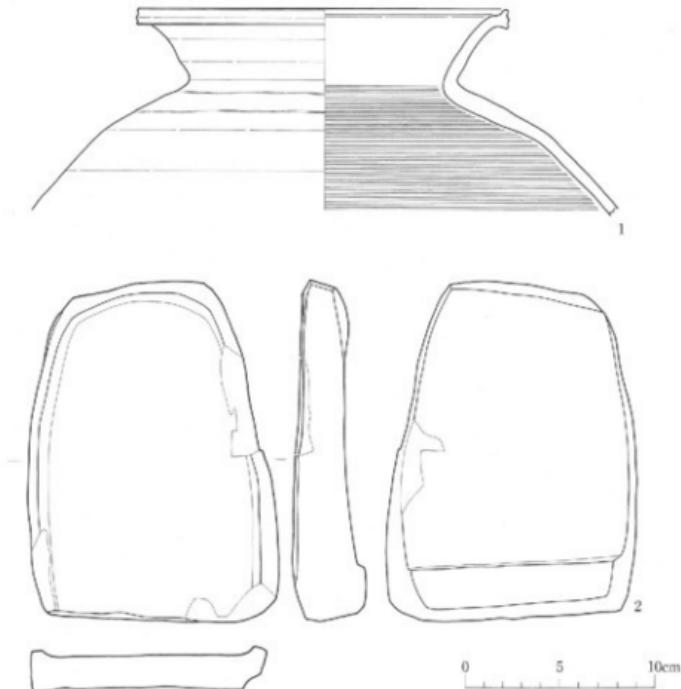
焼成部…2.24m以上 最大幅……1.32m

遺存高…0.27m

燃焼部…1.51m以上 焼成部境幅…0.97m 焚口幅…不明

遺存高…0.35m

前庭部…なし？



9号窑跡

番号	解 位	種 別	口徑cm	底径cm	器高cm	登 錄	分 類	写真図版
1	床	瓶壺器類	(19.8)	(31.2)	(10.8)	9-2		
2	埋土	瓶	幅13.2	長さ18.4	厚さ3.8		8-8-1	

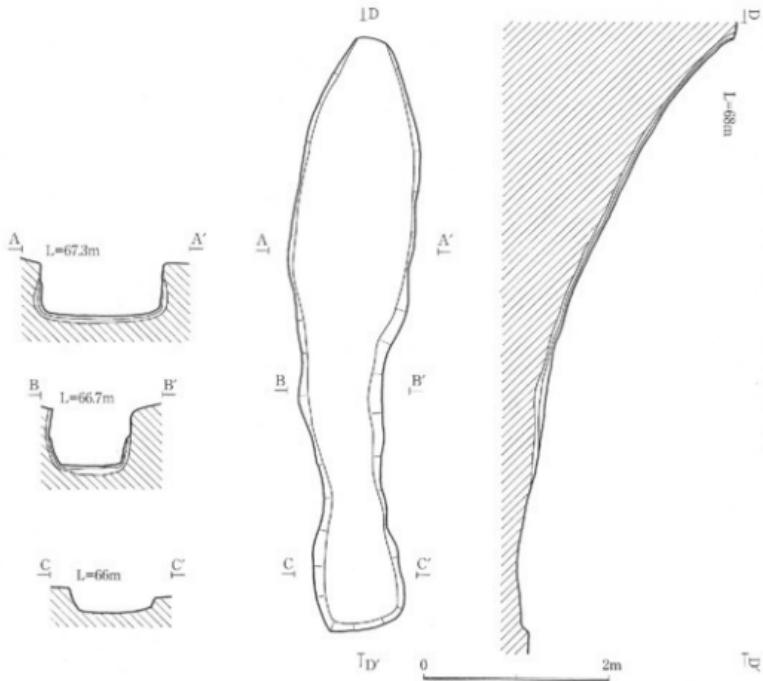
第24図 9号窑跡出土遺物

【煙道部】遺存部分でみると、底面は、焼成部と同じ傾斜のまま移行したようである。このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん膨らんで、窯尻に向かい再び狭くなる。床面は、窯尻付近で1面認められ、還元→酸化している。傾斜は23°を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部に対してくびれ、焼成部境から手前に先細り気味になる。床面は1面で、還元→酸化している。傾斜は12°を測る。

【前庭部】不明。



第25図 10号窯跡

【出土遺物】須恵器甕1点、短頸壺1点、風字硯1点を図示した。

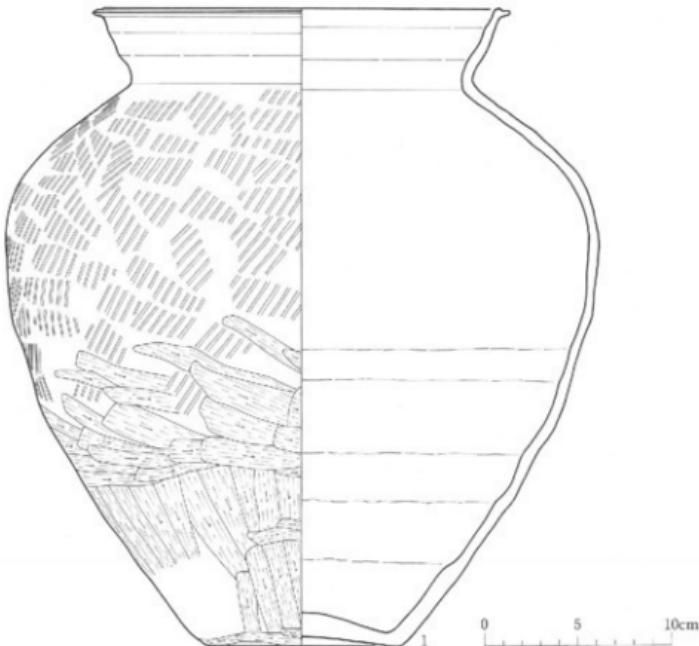
須恵器甕（第24図1）床面から出土した、「く」字状に屈曲する口縁部片である。内面にカキ目が残る。

須恵器短頸壺（第42図3）前庭部埋土から出土した、口縁部～胴部肩片である。つくりが薄く、小型品になると思われる。

須恵器風字硯（第24図2）埋土から出土した、完形品である。

10号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0～68.0mラインに横並びした7基（5、7～12号）の須恵器窯跡のうち、左から2番目のものにあたる。遺存状態は良好であり、窯尻まで確認された。



10号窯跡 (1)

番号	層位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1 床	灰窓跡		(22.2)	(31.6)	34.5			9-1-1

第26図 10号窯跡出土遺物 (1)

【重複関係】なし。

【窯体構造】 煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる半下式窯である。

【遺存規模】 全体……長さ6.40m (窯体4.80m)

 焼成部…長さ3.30m以上 最大幅……1.20m 遺存高…0.58m

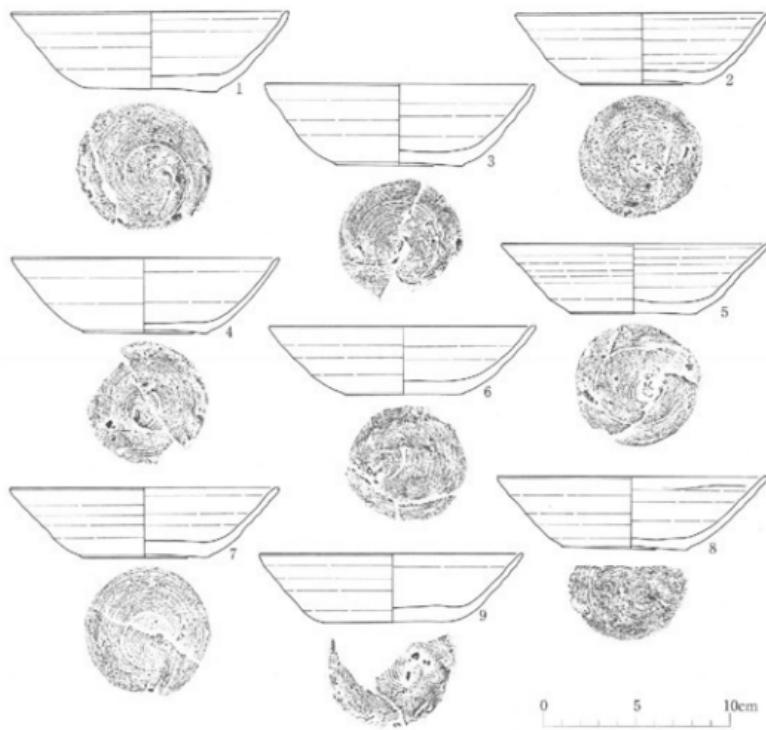
 燃焼部…長さ1.50m以上 焼成部境幅…0.70m 焚口幅…0.50m 遺存高…0.64m

 前庭部…長さ1.60m

【煙道部】 底面は、焼成部と同じ傾斜のまま移行している。このことから、奥部開口型と判断される。

【焼成部】 平面形は槍先形を呈し、最大幅の位置は、ほぼ中位に求められる。床面は1面認められ、還元→酸化している。縦断面形は弓なりで、傾斜は平均26°を測る。

【燃焼部】 平面形は燃焼部に対してくびれ、焼成部境から、先細り気味となる。床面は1面で、



10号窯跡(2)

番号	層位	種別	口径cm	底径cm	厚さmm	器高mm	登録	分類	写真図版
1	床	須恵器坏	14.8	6.8	4.2	10.3	B II c	9-5-1	
2	床	須恵器坏	13.6	6.7	3.8	10.2	C II c	9-4-1	
3	床	須恵器坏	14.4	6.7	4.4	10.6	C II c	9-2-2	
4	床	須恵器坏	(14.3)	6.6	4.1	10.5	C II c		
5	床	須恵器坏	14.2	6.7	3.7	10.7	C II c	9-3-2	
6	床	須恵器坏	14.4	6.4	3.7	10.8	C II c	9-2-1	
7	床	須恵器坏	14.4	6.8	3.8	10.1	C II c	9-3-1	
8	床	須恵器坏	14.4	6.7	3.9	10.9	C II c	9-5-2	
9	床	須恵器坏	(14)	6.6	3.7	10.4	C II c		

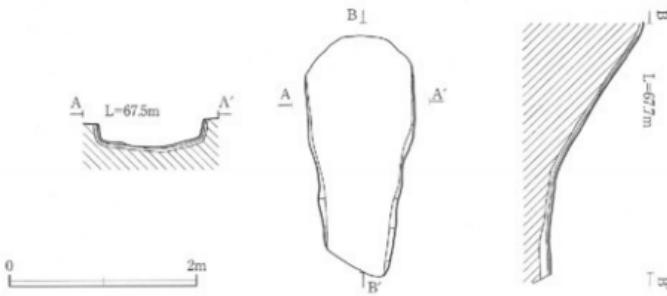
第27図 10号窯跡出土遺物(2)

底面は還元→酸化していた。傾斜は7°を測る。

【前庭部】燃焼部に対して、やや幅の広い方形を呈する。底面高は、燃焼部より若干低い。

【出土遺物】須恵器坏9点、壺1点を図示した。

須恵器坏(第27図1~9) いずれも床面から出土した。器形は、「坏形」と「椀形」の中間形



第28図 11号窯跡

態を呈し、底部は回転糸切り無調整である。

須恵器窯（第26図1） 床から出土した。平底の中型品で、口縁部端が、水平面をなすのが特徴的である。胴部最大径は中位より上にあり、肩が張る。器面には、外面上半に平行叩き目、下半に手持ちヘラケヅリの痕跡が観察される。

11号窯跡

【位置・遺存状態】 南集中区で検出された。標高66.0～68.0mラインに横並びした7基（5、7～12号）の須恵器窯跡のうち、左邊のものにあたる。遺存状態は、窯尻と焼成部下端が失われていた。しかし、周辺地形の状況を勘案すると、小規模窯であった可能性が高いと思われる。

【重複関係】 なし。

【窯体構造】 半下式寄窯と推定される。

【遺存規模】 全体……長さ2.56m以上（窯体2.56m以上）

焼成部…長さ1.23m以上	最大幅……不明	遺存高…0.31m
---------------	---------	-----------

燃焼部…長さ1.33m以上	焼成部境幅…0.84m	焚口幅…不明	遺存高…0.28m
---------------	-------------	--------	-----------

前庭部…不明

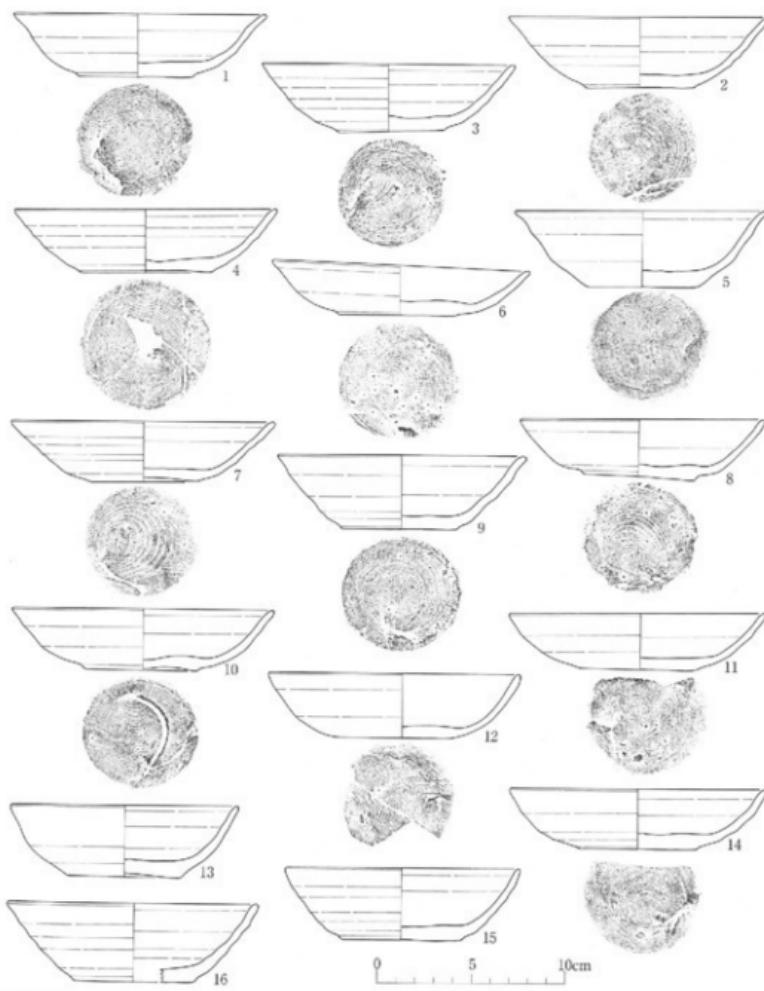
【煙道部】 不明。

【焼成部】 平面形は、焼成部境から奥に向かって幅広になっている。床面は1面認められ、還元→酸化していた。傾斜は急で、32°を測る。

【燃焼部】 平面形は焼成部境から、先細り気味となる。底面は還元→酸化しており、傾斜はほぼ水平の1°を測る。

【前庭部】 不明。

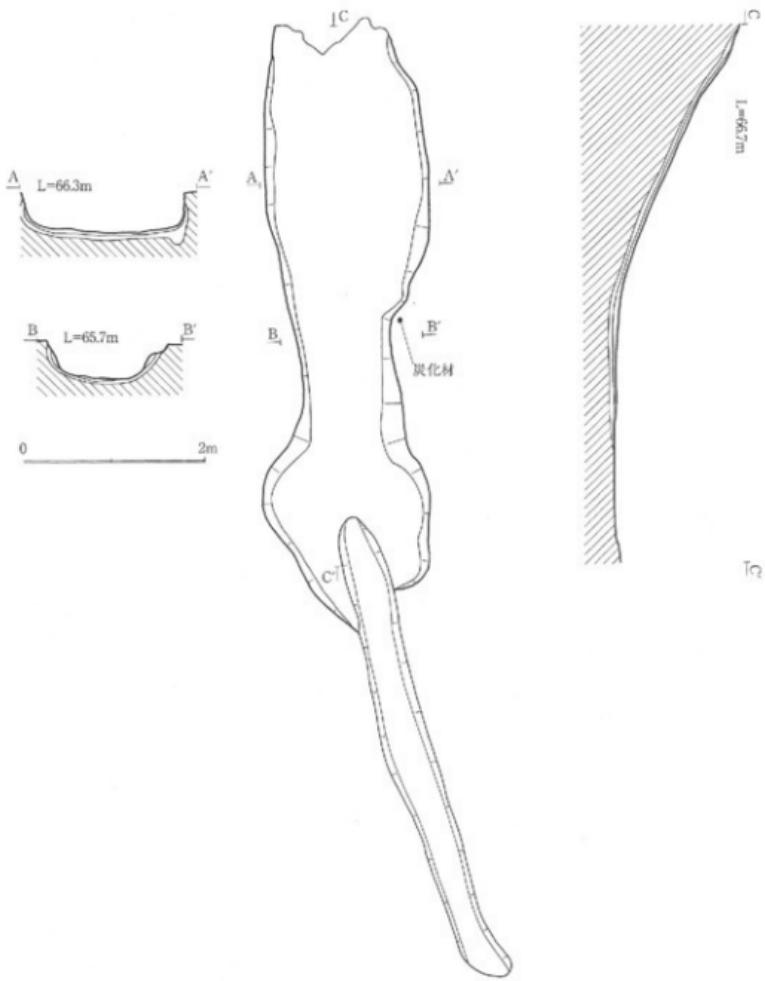
【出土遺物】 須恵器壺14点、壺1点を図示した。



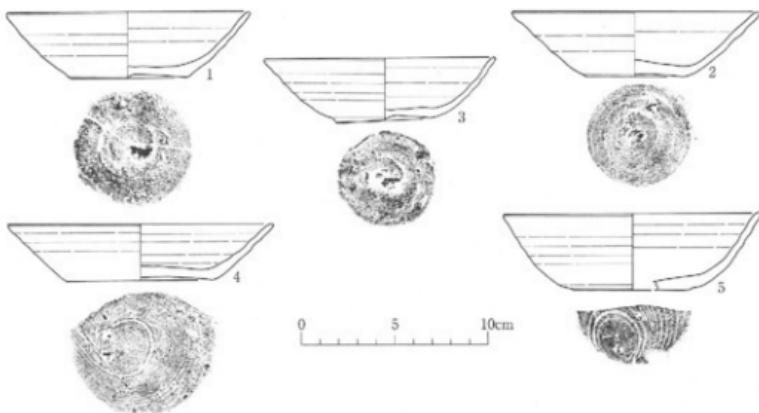
11号窑群

器号	部位	特征	口径cm	底径cm	器高cm	年代	分属	厚质圆版
1	床	须志器环	13.4	6.2	3.3	11-17	C II c	10-2-2
2	床	须志器环	(14.1)	5.9	3.8	11-2	C II c	
3	床	须志器环	13.5	5.6	3.7	11-13	C II c	9-8-2
4	床	须志器环	(14)	7	3.8	11-12	B II c	9-6-2
5	床	须志器环	13.7	5.8	4.1	11-11	C II c	10-1-2
6	灰土	须志器环	13.7	6.2	2.7	11-14	C II c	10-2-1
7	床	须志器环	(14)	5.8	3.3	11-15	C II c	
8	床	须志器环	13.1	6.1	3.2	11-18	C II c	10-1-1
9	床	须志器环	13.4	6.1	4	11-19	C II c	9-8-1
10	床	须志器环	14.1	6	3.3	11-4	C II c	
11	床	须志器环	13.8	6.2	3	11-7	C II c	9-6-1
12	床	须志器环	(13.6)	6	3.5	11-6	C II c	9-7-1
13	床	须志器环	(12.2)	6	3.8	11-16	C II c	
14	床	须志器环	(13.8)	6.4	3.2	11-3	C II c	
15	床	须志器环	(12.6)	6.4	3.8	11-8	B II c	
16	床	须志器环	13.5	6.6	4.2	11-5	C II c	

第29图 11号窑群出土遗物



第30図 12号窓跡



12号窯跡

番号	場位	種別	L径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1	床	須恵器坏	(132)	6.4	3.6	12-4	C I c	10-3-1
2	床	須恵器坏	(134)	5.5	3.5	12-2	C I c	
3	床	須恵器坏	12.4	5.1	3.4	12-5	C I c	10-3-2
4	床	須恵器坏	14.3	7.8	3.1	12-3	C II c	
5	床	須恵器坏	(139)	(6.2)	4.1	12-1	C II c	

第31図 12号窯跡出土遺物

須恵器坏（第29図1～16）いずれも床面に密着して出土したものである。器形は「輪形」を呈し、口径／底径比・口径／器高比が小さく、底部が回転糸切り無調整という点で、齊一性が認められる。

須恵器壺（第42図1）床面から出土した。頸部が「く」字状を呈し、口縁部端は上下に挽き出されている。胴部外面に叩き目、内面に当て目が残る。

12号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。標高66.0～68.0mラインに横並びした7基（5、7～12号）の須恵器窯跡のうち、右から2番目のものにあたる。遺存状態は、窯尻が削平を受け、確認できなかった。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部、外延排水溝からなる半下式窯窯である。

【遺存規模】全体……長さ10.63m以上（窯体4.90m以上）

焼成部…長さ3.30m以上 最大幅…1.58m 遺存高…0.42m

燃焼部…長さ1.60m 焼成部境幅…0.88m 焚口幅…0.78m 遺存高…0.40m

前庭部…長さ1.73m 最大幅…1.60m

【煙道部】床面は、窯尻近くまで、ほぼ焼成部と同じ傾斜のまま立ち上がる。このことから、奥部開口型と推定される。

【焼成部】平面形は、焼成部境からいったん幅広になり、また先細りになる。床面は1面認められ、還元→酸化していた。傾斜は25°を測る。

【燃焼部】平面形は、焼成部に対しくびれ、焼成部境とほぼ同じ幅で手前に伸びる。床面は1面で、還元→酸化していた。傾斜は、ほぼ水平の1°を測る。焼成部境の右側壁から、構架材が1個検出されている。

【前庭部】平面形は、焼成部より幅広になり、底面は連続してほぼ水平面をなす。

【外延排水溝】前庭部中央から、斜面下に細長く延伸している。主軸方向は沢の中心を向き、窯体より右にずれている。長さ5.20m、幅41~45cm、検出面からの深さ3~28cmを測る。

【出土遺物】須恵器壺5点を図示した。

須恵器壺（第31図）いずれも床面から出土した。器形は「壺形」（4ほか）と「榎形」（3ほか）が混在する。しかし、口径／底径比と口径／器高比が小さいこと、また、底部が回転糸切り無調整という点に、共通性が認められる。

13号窯跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。これまで記述した、同地点の7基（5、7~12号）の須恵器窯跡の位置より標高の高い、70.0mラインに単独で分布している。右脇に、1号住居跡がある。遺存状態は良好であった。

【重複関係】なし。

【窯体構造】煙道部、焼成部、燃焼部、前庭部からなる地下式窯窓である。

【遺存規模】全体……長さ8.68m（窯体5.60m）

焼成部…長さ3.80m 最大幅……1.80m 遺存高…0.60m

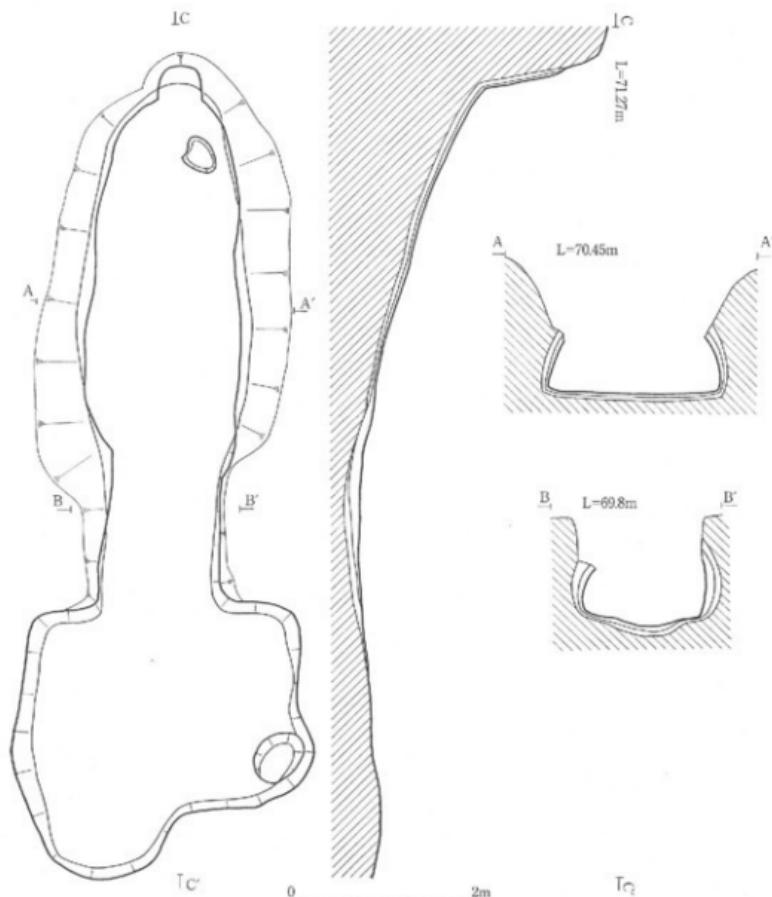
燃焼部…長さ1.80m 焼成部境幅…1.30m 焚口幅…1.17m 遺存高…1.32m

前庭部…長さ2.70m 最大幅…2.93m

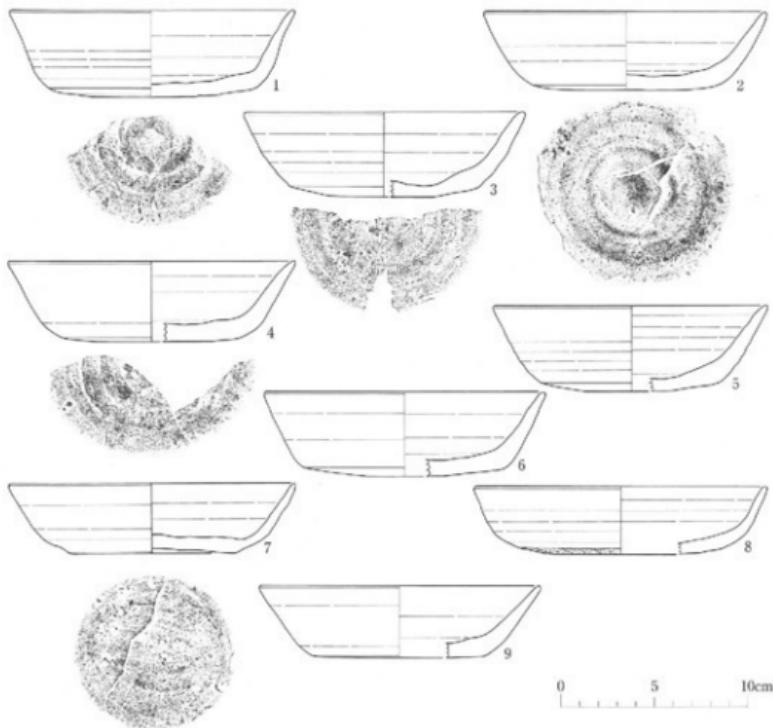
【煙道部】直立煙道で、主軸から右へ、ややずれた位置にある。奥壁は窯尻から38cm突出し、幅38cm、遺存高152cmを測る。

【焼成部】平面形はずんぐりした槍先形をなし、最大幅の位置は、中位より手前に求められる。この点で、同じ地下式窯窓の5号窯跡との違いが指摘される。床面は、1面認められ、還元→酸化していた。縦断面形はやや弓なりで、傾斜は17~21°を測る。また、横断面形は、「かまばこ」形をなす。

【燃焼部】平面形は、燃焼部に対して明瞭にくびれ、焼成部境と同じ幅の方形をなす。床面は



第32図 13号窓跡



13号窑跡

番号	部位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1	床面	須恵器坏	(14.2)	(11)	4.6	13-11	A2 I b	
2	床面	須恵器坏	(15)	10	4.3	13-2	A2 I b	10-5-1
3	床面	須恵器坏	15	10	4.6	13-5	A2 I b	10-4-2
4	床面	須恵器坏	(15.3)	9.5	4.4	13-3	A2 I b	10-5-2
5	前施壁上	須恵器坏	(14.6)	(9.5)	4.7	13-1	A2 I b	10-4-1
6	前施壁上	須恵器坏	(15)	(10.8)	4.7	13-4	A2 I b	10-7-1
7	床面	須恵器坏	15.3	8.7	3.8	13-6	A2 I b	10-6-1
8	床面	須恵器坏	(15.6)	(11)	3.7	13-7	A2 I b	
9	埋土	須恵器坏	(15)	(9.3)	3.9	13-8	A2 I b	

内面に×

第33図 13号窑跡出土遺物

1面で、還元→酸化していた。底面傾斜は12°を測り、断面形は「かまぼこ」形を呈する。

【前部】奥壁がきれいに角張って、横長の方形基調をなす。底面は、燃焼部の連続で、焚口手前60cmの範囲まで酸化していた。傾斜は、奥に向かって4°逆傾斜している。

【出土遺物】須恵器坏9点を図示した。出土状況は一定していないが、器形・細部特徴に齊一性がみられる。したがって、すべて共伴資料と見做せる。

須恵器坏（第33図1～9）5・6・9は埋土、他は床面から出土した。器形の特徴は、口径／



第34図 1号住居跡

底径比が大きく、底部は、丸底風平底ないし平底をなす。また、全体に器壁が厚い点も、目立った特徴といえる。底部痕跡は、手持ちヘラケズリが施される7を除き、すべて回転ヘラ切り無調整である。

竪穴住居跡

2軒検出された。どちらも、須恵器窯跡の脇に立地し、通常の当該遺構に比べて規模が小さい。このことから、性格は須恵器生産に伴う工房ないし窯焚き時の仮設作業小屋と想定される。

1号住居跡

【位置・遺存状態】南集中区で検出された。13号窯跡の右脇にある。斜面下半分は、床面が遺存しない。

【重複関係】なし。

【平面形・規模】方形を呈し、遺存長で、 $1.30m \times 1.30m$ を測る。実際の規模も、ほぼこれと大差無かったと推定される。



第35図 2号住居跡

【カマド】南西隅に付設されていた。構造的には、集落内住居のカマドと、何ら変わりはない。煙道が斜面上に、 $1.12m$ 直線的に伸び、先端はピット状をなす。

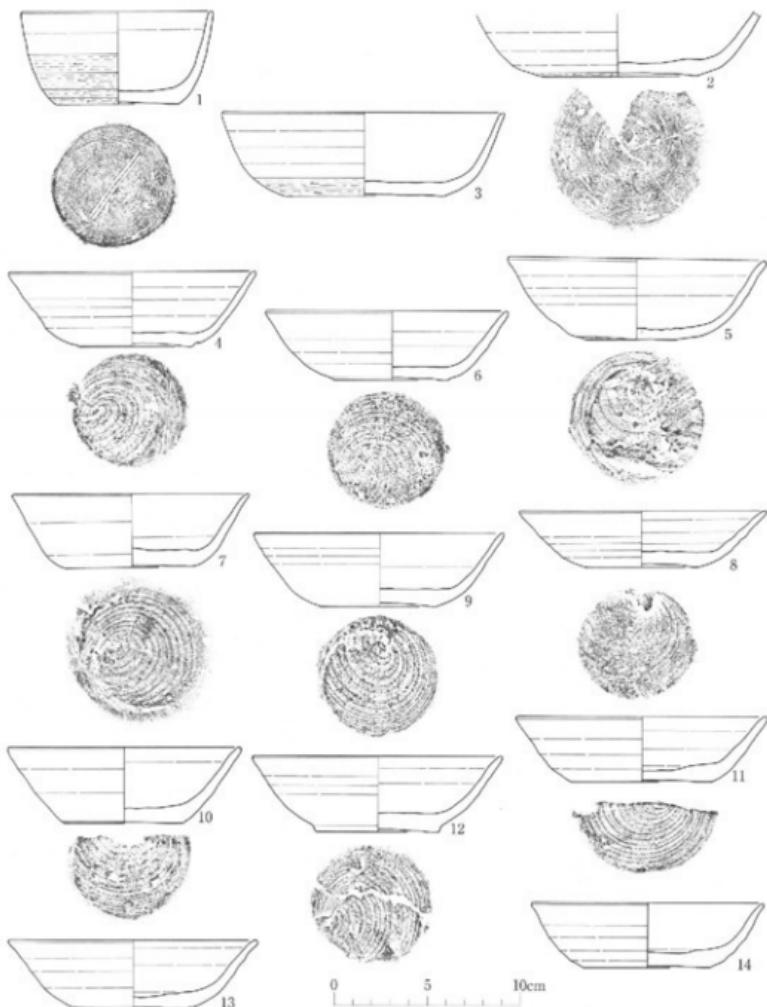
【出土遺物】土師器甕1点を図示した。

上師器甕（第43図1）出土層位不明の完形品である。器形の最大径位置は、口縁部に求められる。

2号住居跡

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。4号窯跡の右下脇、2号土坑の斜面真下に営まれている。下半分は、床面が遺存しない。

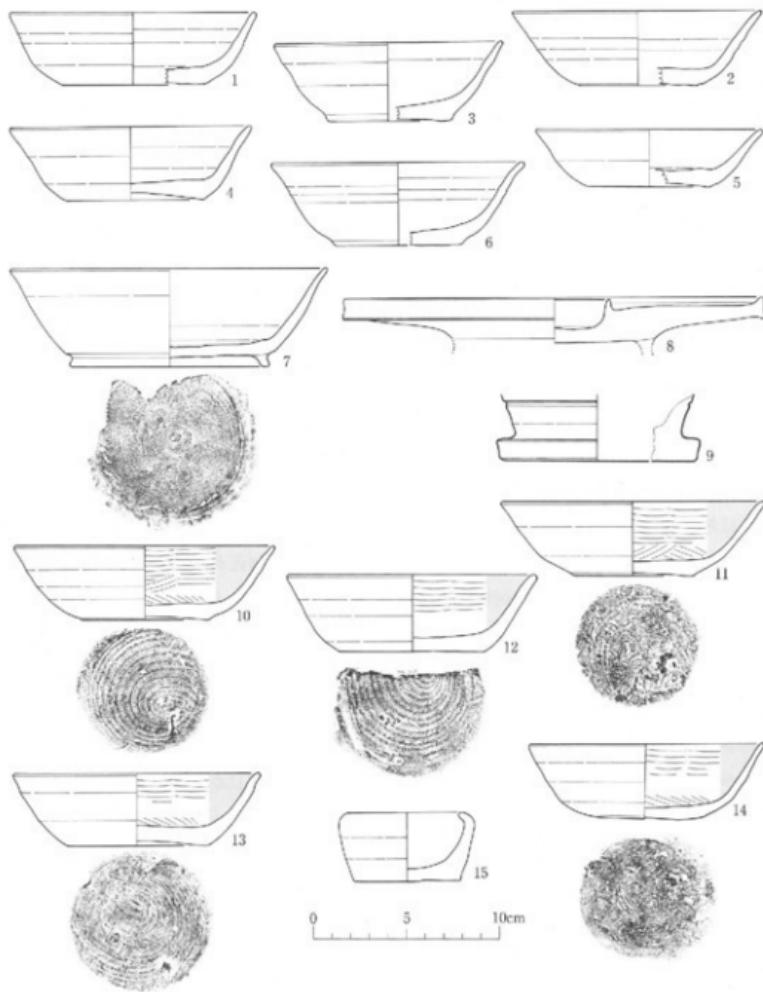
【重複関係】南西隅で、2号土坑とわずかに重複している。しかし、層位的な新旧は、記録が残されていないため、不明である。



2号住居跡(1)

番号	附位	種別	L径cm	底径cm	厚底cm	登録	分類	写真版
1	固座	环	103	66	5	2件.1		11-1-1
2	埋土	瓶底器环		84		2件.14		現物不明
3	埋土	瓶底器环	(15)	84	45	2件.29		現物不明
4	埋土		132	61	41	2件.4	C II c	現物不明
5	埋土		138	7	44	2件.2	C II c	10-8-2
6	埋土		129	63	38	2件.5	C II c	11-2-2
7	埋土		128	7	4	2件.20	B II c	10-8-1
8	埋土	瓶底器环	(13)	6	31	2件.12	C II c	現物不明
9	埋土		133	63	4	2件.25	C II c	11-3-1
10	埋土	瓶底器环	(125)	61	41	2件.9	C II c	現物不明
11	埋土	瓶底器环	(133)	71	35	2件.28	B II c	現物不明
12	埋土	瓶底器环	(134)	68	41	2件.7	C II c	11-1-2
13	埋土	瓶底器环	(133)	59	39	2件.19	C II c	現物不明
14	埋土		129	61	38	2件.5	C II c	現物不明

第36図 2号住居跡出土遺物(1)



2号住居跡(2)

番号	属 位	種 別	口径cm	底径cm	器高cm	登 錄	分 類	写真図版
1	埋土	須志器环	(13.2)	7.6	3.89	2住-10	B II c	
2	埋土	須志器环	(13.3)	6.3	4	2住-13	C II c	
3	埋土	須志器环	(12.2)	(6.6)	4.1	2住-16	B II c	
4	埋土		13	7.4	4	2住-6	B II c	11-2-1
5	埋土	須志器环	(12.2)	6.5	3.1	2住-27	B II c	
6	埋土	須志器环	(13.5)	6.8	4.5	2住-8	B II c	
7	埋土	須志器高台付环	17	10.6	5.3	2住-22		11-4-1
8	埋土	須志器托	(23.6)			2住-33		12-4-1
9	埋土	こね鉢		10.6		2住-32		
10	埋土	土師器环	14	6.8	4	2住-3		
11	埋土		14	6.5	4	2住-17		11-4-2
12	埋土	土師器环	(13.4)	7.8	4.1	2住-21		
13	埋土		(13.2)	(7.6)	3.2	2住-8		
14	埋土	土師器环	12.7	6.3	4.1	2住-24		11-3-2
15	埋土	手づくね土製品	6.3	5.7	3.7	2住-30		

第37図 2号住居跡出土遺物(2)

【堆積上】4層に分層された。このうち、第1・2層は焼土・炭・窯壁片が充満し、明らかに須恵器窯の2次堆積物と判断される。具体的には、位置関係と出土遺物の内容から、主に4号窯跡の可能性が高いと思われる。

【平面形・規模】方形を呈している。規模は、東西2.77m、南北3.53m以上を測る。

【カマド】遺存範囲では、確認されていない。

【周溝】壁直下に、設けられている。幅23~29cm、床面からの深さ6~8cmを測る。

【ピット】2基検出された。P1は、74×90cm、検出面からの深さ16cm、P2は、53×97cm、床面からの深さ25cmを測る。ロクロピットや白色粘土溜の可能性もあるが、堆積土が記録されておらず、性格不明である。

【出土遺物】須恵器窯20点、高台坏1点、托1点、こね鉢1点、土師器坏5点、ミニチュア土器1点を図示した。出土状況は、第36図1を除くとすべて埋土出土であり、多量に出土した須恵器は、4号窯跡などからの流れ込みが主体と推定される。それに対して、土師器坏はその可能性は無いので、本住居跡に伴う可能性が高いと思われる。

須恵器坏（第36図1~14、第37図1~6）大別して、底径／口径比が大きく、切り離し不明→回転ヘラケズリのグループ（第36図1~3）と、底径／口径比が小さめで、回転糸切りないし回転ヘラ切り？→無調整のグループ（第36図4~14、第37図1~6）に区分される。後者は、回転糸切り底主体で、回転ヘラ切り？底のものに対して、底径／口径比が小さい傾向が認められる。

須恵器高台坏（第37図7）坏部の器形は、底径／口径比が大きく、口縁部～体部が外傾して立ち上がる。高台部は角高台で、短い。口縁部の外反が弱い点が気になるが、黒径14号窯式の灰釉陶器碗の影響が感じられる。

須恵器托（第37図8）口縁部内面にミガキが施され、隆帯が巡ることから、托と判断した。高台は欠損している。

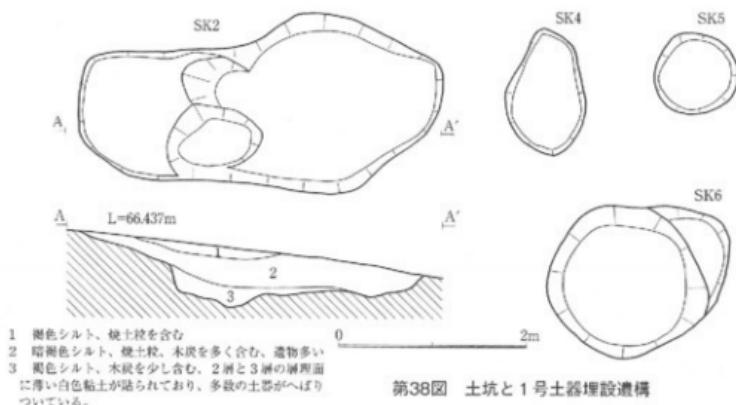
須恵器こね鉢（第37図9）底部片になる。刺突は認められない。

土師器坏（第37図10~14）いずれも底部が分厚く、回転糸切り底である。このうち、14は手持ちヘラケズリが施されている。また、逆台形の12・13は、底部内面のミガキが井桁状に施され、技術的に古相を示す。

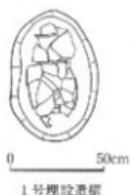
ミニチュア土器（第37図15）口縁部が内傾した、平底鉢形を呈している。

土器埋設遺構

1基検出された。調査時はカメ棺墓に登録されたが、ここでは、性格を特定しない遺構名称に変更した。



第38図 土坑と1号土器埋設遺構



1号土器埋設遺構

【位置・遺存状態】現地説明会資料に、「調査区南側の窓跡東側で発見された」と記述されている。しかし、具体的な位置は不明。遺存状態は良好である。

【重複関係】なし。

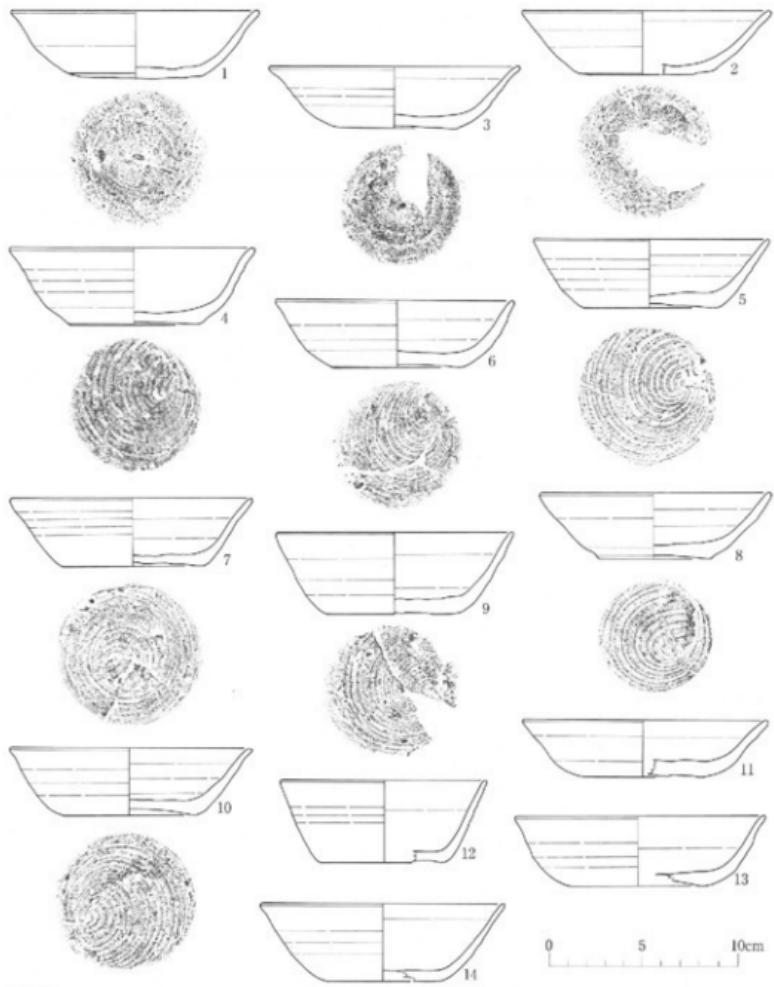
【平面形・規模】平面形は梢円形を呈し、規模は、 $1.43m \times 0.95m$ を測る。検出面からの深さは、不明である。

【出土遺物】土師器甕3個体が、合わせられた状態で出土している。しかし、うち2点の実物ならびに実測図が所在不明となっている。

土 坑

現地説明会資料によると、これまで記述した遺構の他にも、「土坑3基・焼土遺構3基が発見された」とある。しかし、現在、原図と図版で確認できるのは、土坑5基（1、4～6号土坑）である。おそらく、焼土遺構は調査の過程で最終的に土坑に含められたと思われる。しかし、数が合わず、また、焼土遺構とされていたものがどれなのか、実測図に被熱痕跡の記録が無く、カラー写真も所在不明のため、特定できない。

以下、詳細な記録の残る2号土坑と、平面図しか確認できない1、4～6号土坑に分けて報告する。

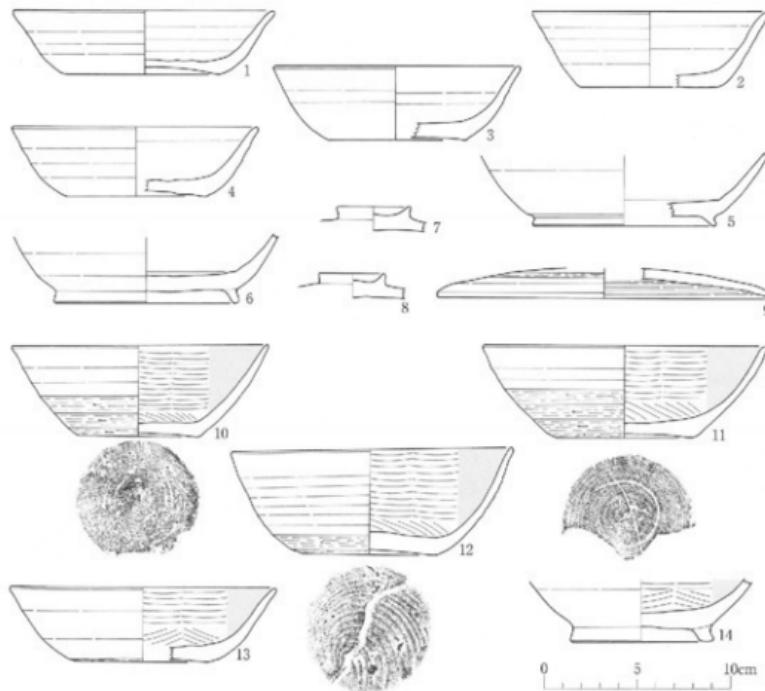


2号土坑

番号	場所	種別	口径cm	底径cm	器高cm	厚さmm	分類	写真図版
1	埋土	須恵器环	13.2	7.3	3.7	2 ± 1	B I c	11-5-1
2	埋土	須恵器环	(13.2)	7.3	3.5	2 ± 1.5	B I c	
3	埋土	須恵器环	(13.3)	6.4	3.3	2 ± 1.6	C I c	11-7-1
4	埋土	須恵器环	(13.1)	7.1	4.2	2 ± 4	B II c	12-2-2
5	埋土		12.5	7.3	3.7	2 ± 6	B II c	12-1-1
6	埋土	須恵器环	12.6	6.9	3.7	2 ± 8	B II c	11-5-2
7	埋土	須恵器环	12.9	7.5	3.7	2 ± 9	B II c	12-2-1
8	埋土	須恵器环	12.2	6	3.6	2 ± 11	C II c	12-1-2
9	埋土	須恵器环	12.6	6.8	4.4	2 ± 14	B II c	11-8-2
10	埋土	須恵器环	12.9	7.1	3.7	2 ± 2	B II c	11-6-1
11	床面	須恵器环	(13)	6.4	3.1	2 ± 18	C II c	
12	埋土	須恵器环	(11)	(7.7)	4.4	2 ± 17	B II c	
13	埋土	須恵器环	13.3	7.2	3.8	2 ± 3	B II c	11-7-2
14	埋土	須恵器环	(13)	(6.4)	4.2	2 ± 22	C II c	

現物不明

第39図 2号土坑出土遺物(1)

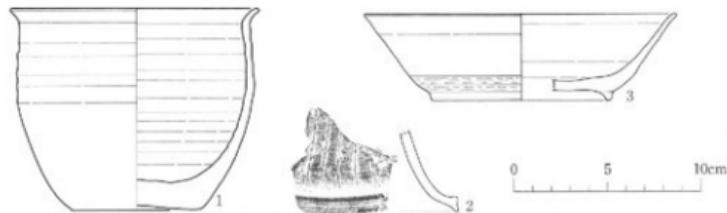


2号土坑

番号	層位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	壁厚	分類	写真図版
1	理土	頸唇器环	(14)	8	3.5	2±19	B II c	
2	理土		12.6	7.4	4.1	2±31	B II c	
3	理土	頸唇器环	(13.1)	7.2	4	2±20	B II c	
4	理土	頸唇器环	13.1	7.5	3.8	2±10	B II c	12-3-2
5	理土	頸唇器高台付环		(9.8)		2±26		
6	理土	頸唇器环		9.8		2±25		
7	理土	頸唇器蓋	3.8			2±29		
8	理土	頸唇器蓋	3.5			2±28		
9	理土	頸唇器環	(17.8)			2±27		
10	理土	土唇器环	13.8	6.5	4.9	2±12		12-3-1
11	理土	土唇器环	(15.1)	7.2	5	2±21		11-6-2
12	理土	土唇器环	15	7.2	5.7	2±5		11-8-1
13	理土	土唇器环	(14.2)	7.9	4	2±23		
14	理土	土唇器高台付环		7.6		2±30		

第40図 2号土坑出土遺物 (2)

現物不明



番号	層位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1	S I 1	土師器蓋	13.3	7.0	10.8			
2		円曲鉢						
3		須恵器高台壺	16.6	9.7	47			

第41図 その他の出土遺物 (1)

4～6号土坑

【位置】いずれも北集中区で検出された（第38図参照）。

【平面形】1号…長楕円形 4号…不整形 5号…円形 6号…円形

【規模】1号…1.92m×0.70m 4号…1.37m×0.87m 5号…0.87m×0.86m

6号…1.75m×1.74m

【深さ】1号…0.16m 他は不明。

【遺物】すべて不明。

2号土坑

【位置・遺存状態】北集中区で検出された。遺存状態は良好である。

【重複関係】下端で2号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明。

【平面形・規模】縦長の楕円形基調を呈している。規模は大型で、3.86m×2.00m、最深部の検出面からの深さは0.49mを測る。底面は斜面上位の西壁側がテラス状に浅くなっている。

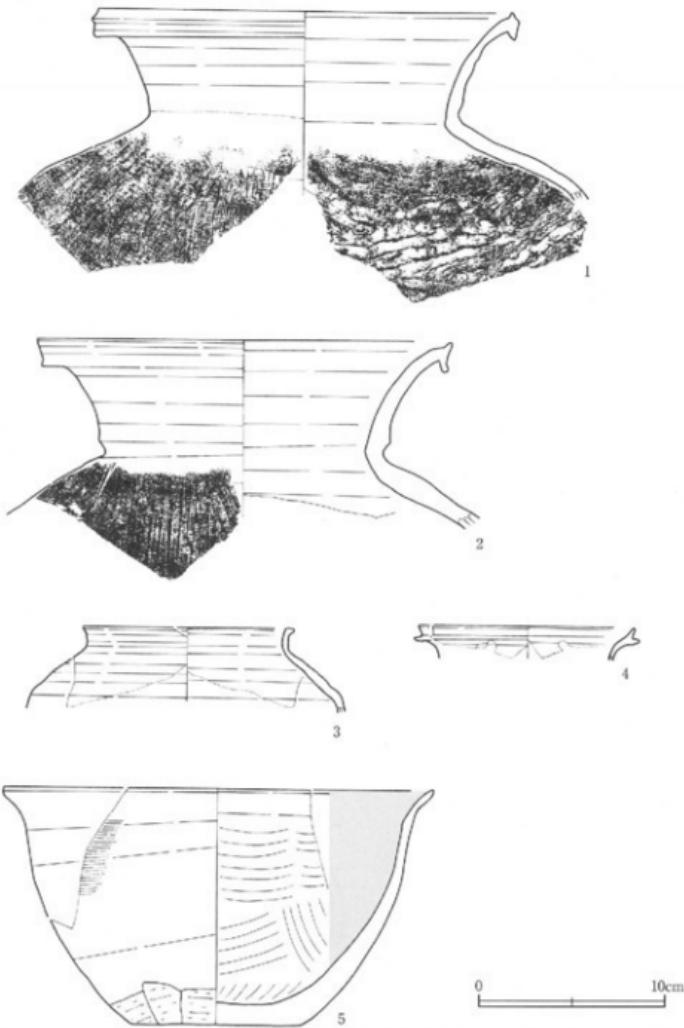
【堆積土】3層に分層された。このうち第2～第3層の層理面で、多量の土器がへばりついた状態で認められた。

【出土遺物】須恵器壺18点、高台壺2点、蓋3点、土師器壺4点、高台壺1点を図示した。遺物様相は、全体的に2号住居跡と類似している。

須恵器壺（第39、40図1～4）確認できる底部痕跡は、ヘラ切り無調整のもの（第39図1～3）と、回転糸切り無調性（第39図4～10）の2種類がみられる。器形は、「壺形」主体で、底径／口径比は、大部分が0.50を上回る。

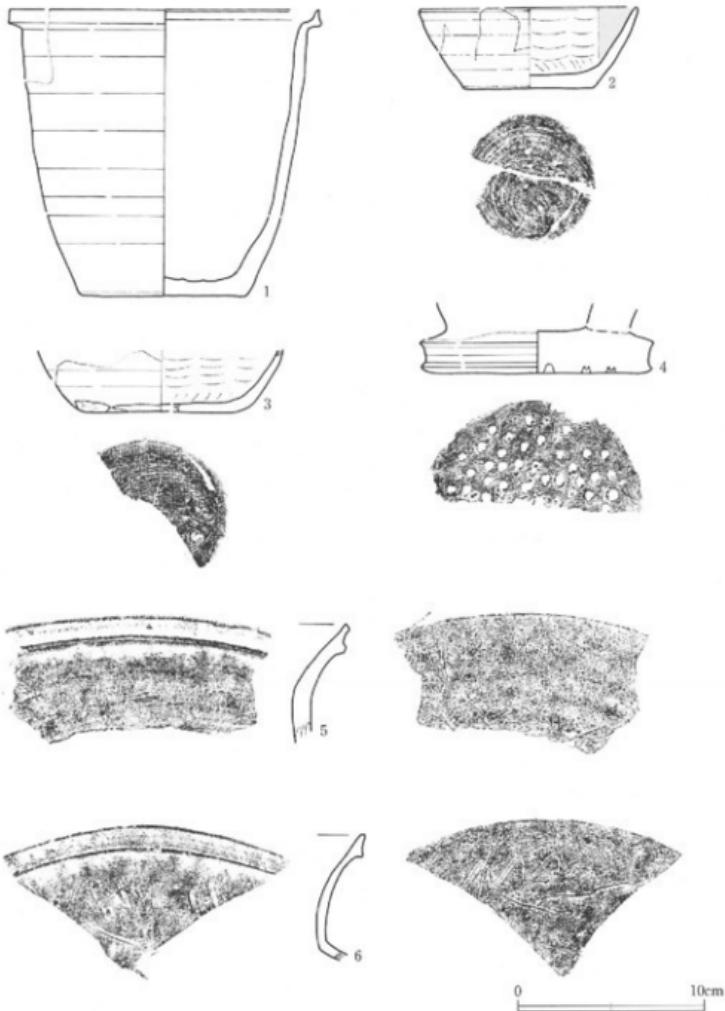
須恵器高台壺（第40図5・6）底径／口径比が大きく、短い角高台が付く。

須恵器蓋（第40図7～9）7・8は環状つまみ、9は器高の低い天井部である。



番号	層位	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
1-1	11空床	肌息器壺	(22.0)					
1-2	南2階東側クロ灰原	肌息器壺	(22.0)					
1-3	9施前庭埴理上	肌息器壺	(11.0)					
1-4	北区調査区東側	肌息器壺	(11.5)				13-3	
1-5	H Z	土器器鉢	23	9	12.6			

第42図 その他の出土遺物 (2)



番号	場所	種別	口径cm	底径cm	器高cm	登録	分類	写真図版
2-1	壁穴	土器	16	9	(15.4)			
2-2	H.Z.	土器	11.6	7	4.3			
2-3	2 土坑埋土	破壊器			8			
2-4	1 溝上層	破壊器こね棒	11.5					13-1-1, 13-2-1
2-5	5 窑焚き口部床	破壊器						12-7, 12-8
2-6	5 窑焚き口部床	破壊器						12-5, 12-6

第43図 その他の出土遺物 (3)

土師器坏（第40図10～13、第43図3） 器高／底径比に幅はあるが、いずれも「坏形」を呈し、回転糸切り→回転ヘラケズリで共通する。

土師器高台坏（第40図14） 底径が小さめで、角高台が付く。

その他の遺物

ここでは、遺構外と帰属不明の遺構出土遺物を一括して扱う。

須恵器高台坏（第41図3） 出土位置・層位不明。坏部は、口径／底径比が大きく、口縁部～体部が直線的に外傾する。高台部は短い角高台である。

須恵器壺（第42図2、第44図1） 第42図2は、遺物カードに「南2窯東側クロ灰原」と記録されている。しかし、具体的な帰属遺構、位置は不明。頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部端は下に大きく拡き出されている。胴部外面に叩き目が観察される。第44図1は、壺の口縁部片である。外面に波状文が施されている。

須恵器壺（第42図4） 「北区調査区東側」から出土した。しかし、具体的位置・層位不明。口径部しか残存しないが、緻密な胎土・堅敏な焼成から、5世紀の製品とみられる。

須恵器円面硯（第41図2、第44図2） 脚部片である。外面に平行沈線がみられる。

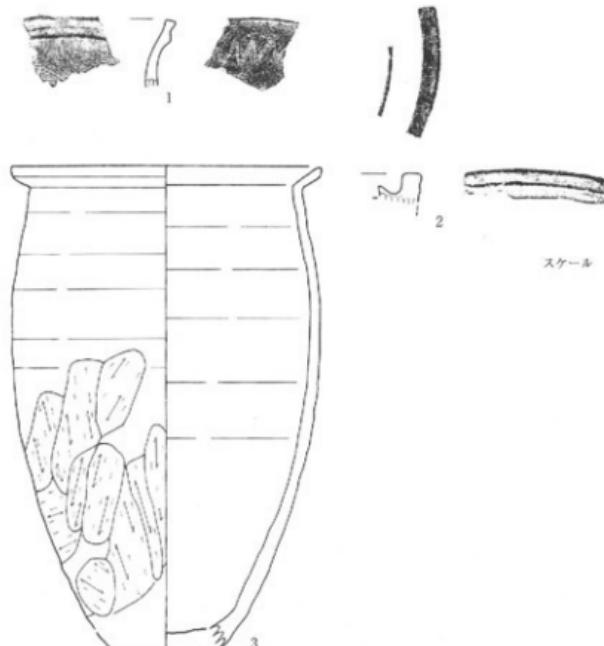
土師器壺（第41図1） 口縁部が短く外反する小壺である。

土師器鉢（第42図5） 平底で、内側して立ち上がる体部から、口縁部が短く外反する。

石製品（第45図1） 砥のミニチュアだろうか。直方体を呈し、片面周縁に溝が掘り込まれている。

鉄砲玉（第45図2） 1点出土している。やや歪な球形である。表面が白い粉をふいたようになっている。

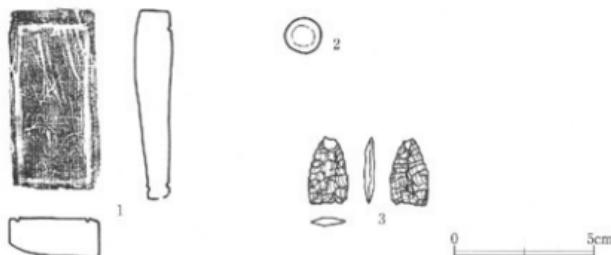
石鏃（第45図3） 三角形を呈し、先端を欠く。



スケール 1・2=1/3
3=1/4

番号	層位	種別	特徴	登録	分類	写真図版
3-1	HZ BS-2 2層	須志器	内外面に波状文、外面に亂帯			
3-2	調査区北側東	円盤鏡	口徑cm (16.6)			13-2-2
3-3	カメ柏	土師器	口径cm 22.1 底径cm (7.2) 器高cm (34.3)			

第44図 その他の出土遺物 (4)



番号	層位	種別	特徴	登録	分類	写真図版
4-1	HZ BS-20 2層上面	石製品	方形の片面、薄直、長さ6.6cm、幅3cm、最大厚1.4cm、重量50.9g			
4-2	南区灰原黑色の上の土	鉄砲弾丸	直径1.3cm、重さ10.9g、表面はザラザラしている			13-5-3
4-3	CW-5、2層	石獣	達賀貝岩、長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量1.1g			13-5-2

第45図 その他の出土遺物 (5)

第5章 考 察

八幡坂遺跡の発掘調査で特筆されるのは、奈良～平安時代の須恵器窯跡12基の発見と、その豊富な製品の一括資料が得られたことである。調査から20年余り経過した現在も、宮城県南地方では最大の窯業生産地成果であり、今回、正式報告が実現した意義は大きい。

以下、この点に主眼を置いて、基本事項の検討を行っていく。

1. 遺物の分類

まず、時期変化を最も鋭敏に反映し、資料数の豊富な須恵器窯の分類を行う。対象は、実測資料138点である。

【器形】(大別基準)

A：底径／口径比0.58～0.80、器高／口径比0.24～0.29。底部は平底状丸底を呈する。モデルは、飛鳥V～平城Iの奈文研分類窯Aと思われる。

※ A 1 …口縁部下端外面に沈線なし(第47図1・2)。

※ A 2 …口縁部下端外面に沈線あり(同図3)。また、A 1 より、器高／口径比・口径値がやや小さい傾向がみられる。

B：底径／口径比0.50～0.57、器高／口径比0.25～0.33。底部は平底を呈する。系譜は、逆台形の金属器系「壺形」窯(第47図9・10他)と、瓷器系「椀形」窯の2タイプ(仙台市教育委員会1987)が認められる^{注1)}。両者の比率は、拮抗する。

C：底径／口径比0.41～0.49、器高／口径比0.20～0.30。底部は平底を呈する。系譜は、Bと同じ2タイプである。しかし、比率は「椀形」窯(第47図14・25)の方が、圧倒的優位を占める。

【底部切り離し】(細別基準)

I : 回転ヘラ切り II : 回転糸切り

【再調整】(細別基準)

a : 全面回転ヘラケズリ b : 手持ちヘラケズリ c : 無調整

以上の分類基準を検討資料に当てはめると、次の9類型が設定できる。

A 1 I b 類…9点 A 2 I b 類…15点

B I b 類…1点 B I c 類…5点 B II c 類…31点 B a 類…1点

C I c 類…9点 C II c 類…66点 C a 類…1点

これらのうち、編年作業の根幹となる主要類型は、A 1 I b・A 2 I b・B II c・C II c 類である。

2. 土器群の設定と相対編年

次に、時間軸設定のため土器群を設定し、相対編年を検討していく。なお、検討材料は窯跡資料に加えて、住居跡・土坑資料も補完的に扱うこととした。

(1) 土器群の設定

各類型の遺構共伴関係から（第1表）、以下のまとめが抽出できる。

I A群…A 1 I b類とA 2 I b類が拮抗	5 窯
I B群…A 2 I b類のみ	13 窯
II群…B I b類・B I c類・B a類の各1点	4 窯
III群…B II c類・C II c類の拮抗	3 窯・2 住・2 坑
IV A群…C I c類2点・C a類1点・B I c類1点	2 窯
IV B群…C I c類・C II c類拮抗	12 窯
IV C群…C II c類のみ、ないし主体	1・10・11 窯
V群…器高／底径比の小さい壺を伴う	8 窯

さらに、ここでは壺を欠いているが、特徴的な高台壺を伴う8号窯跡資料をVI群として加える。そして、それぞれを、I A群土器、I B群土器、II群上器、III群土器、IV A群土器、IV B群土器、IV C群土器、V群土器と読み替えることとする。

	1 窯	2 窯	3 窯	4 窯	5 窯	10 窯	11 窯	12 窯	13 窯	2 住	2 坑	8 I
口径平均	13.1	12.9	12.8	13.4	14.4	14.3	13.5	13.4	15.2	13.1	13	
口径/底径比平均	0.49	0.47	0.47	0.53	0.71	0.47	0.45	0.46	0.67	0.5	0.54	
口径/器高比平均	0.29	0.3	0.31	0.28	0.27	0.27	0.26	0.26	0.29	0.3	0.29	
A 1 I b				9								9
A 2 I b					6					9		15
B 1 b						1						1
B 1 c			1	1	1							2
B 2 c		3		7				2		7	12	31
B a				1								1
C 1 c			2	3					3			1
C 1 c		7		21			9	14	2	10	3	66
C a			1									1
計	10	4	32	3	15	9	16	5	9	17	18	138

第1表 遺構共伴関係

(2) 相対編年の検討

次に、遺構の重複関係を確認すると、発掘調査では、次の古→新の関係が捉えられた。

(i) 2号窯跡→1号窯跡 (ii) 5号窯跡→9号窯跡 (iii) 7号窯跡→8号窯跡

このうち(i)の所見から、IV A群土器→IV C群土器の関係が導き出せる。しかし、残る(ii)・(iii)では、片方ないし両方の須恵器窯跡に分類可能な壺が伴わず、これ以上の情報は得られない。

そこで、二次的にこれまでの研究成果（柳澤1994、村田1995、吾妻2001他）を援用することにしたい。奈良～平安時代の須恵器壺は、口径/底径比の縮小(A→B→C)、底部切り離し

の移行（I → II）、底部再調整の省略（a → b → c）の漸移的变化がみられ、さらに、9世紀末から皿形形態が顕在化し、10世紀に入ると、急激に衰退していくことが明らかにされている。こうした視点により、本遺跡の土器群には、次の相対編年が考えられる。

I期 [IA・IB・V群土器] → II期 [II・IVA群土器] → III期 [III・IVC群土器] → IV期 [IVB・IVC群土器]

以上のうち、III期は前半と後半に段階区分する。

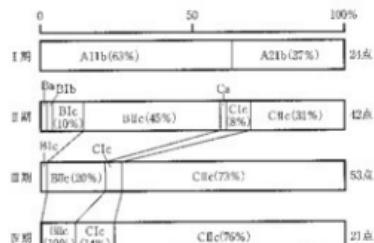
3. 各期の土器様相

ここでは、坏の主要類型の消長に主眼を置き、各期の様相を具体的にみていく。

[I期] 5・8・13号窯跡の出土資料を基礎とする（IA・IB・V群土器）。

生産器種には、坏・高台坏・椀・蓋・甕が確認される。坏は、主要類型であるA1 I b・A2 I b類の単純な類型構成がみられる（第46図）。両者は、口縁部沈線の有無に違いが認められるものの、基本器形と製作技術は同一である。また、口径値が大きく（14～15cm台）、後続期と開きがある点も共通する。

ただ、5号窯跡の製品は、器壁が薄くシャープなのにに対し、13号窯跡の製品は、はってりしてぶ厚い。また、5号窯跡では、2類型がほぼ拮抗して生産されるのに対し（3：2）、13号窯跡では、A1 I b類が単独で生産される。さらには、8号窯跡では坏の替わりに、坏A1 I b類を高台に乗せた高台坏（第47図4）が生産され、窯单位で食膳具の器種・類型構成が違い、5・13号窯跡間では、技術レベル差のある別工人の製品が焼成されたことを示す。

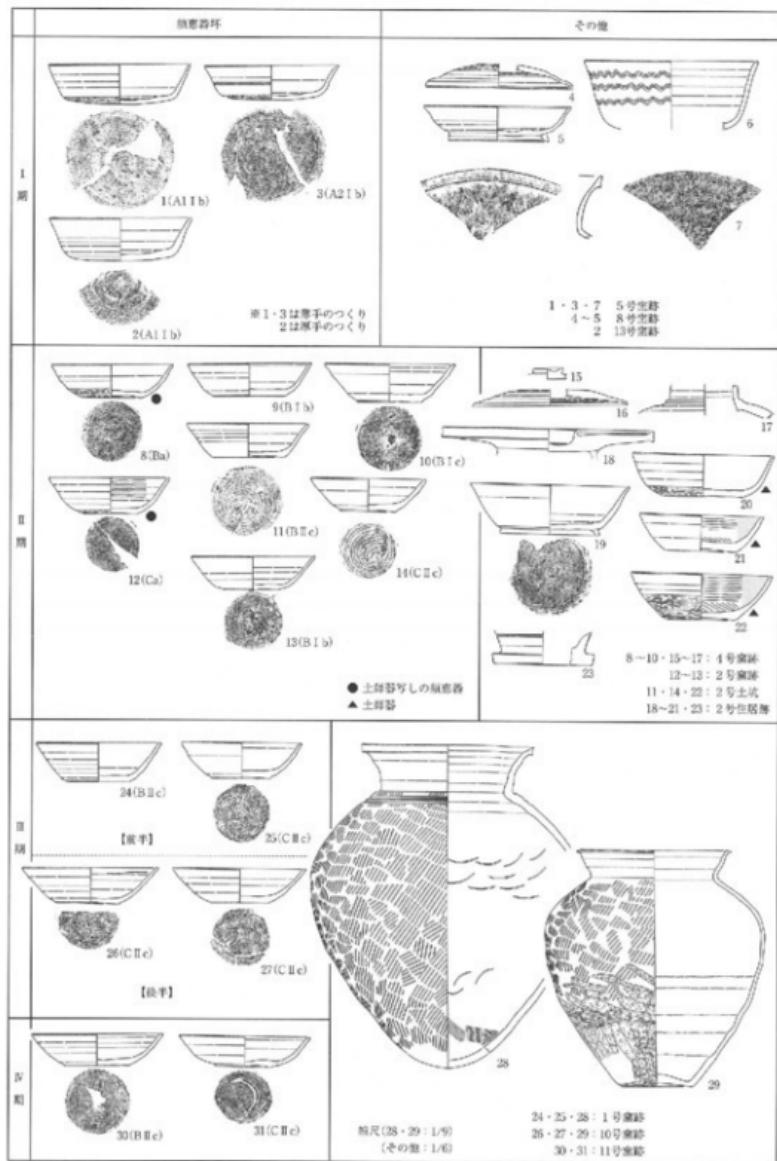


第46図 坏類型の消長

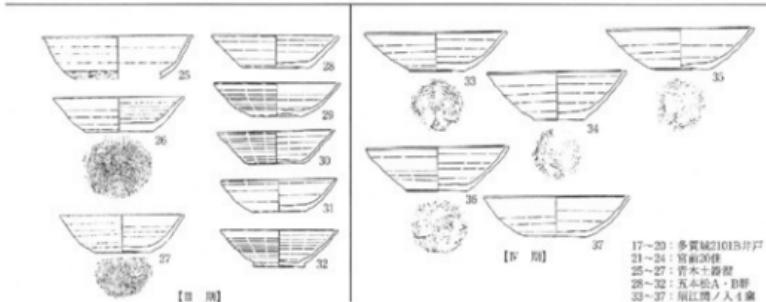
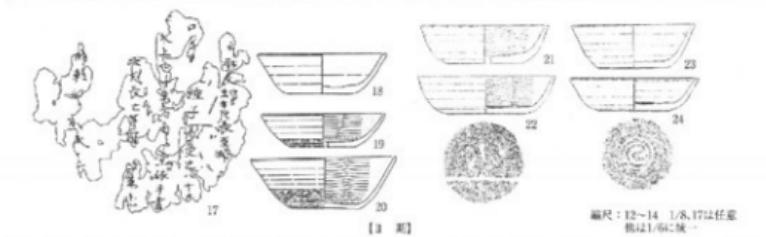
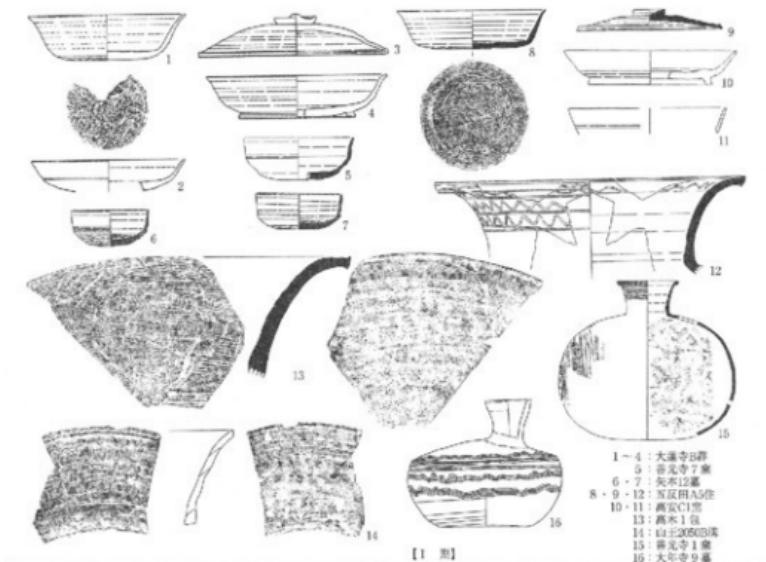
他の器種をみると、高台坏とセットの蓋は、既に内面のカエリが消失している（同図4）。また、5号窯跡の椀は口縁部外面、甕は口縁部内外面に波状文が巡り、過剰な装飾傾向が指摘できる（同図5・6）。

[II期] 2・4号窯跡の出土資料を基礎とする（II・IVA群土器）。さらに、数量不足を補うため、2号住居跡、2号土坑の出土資料（III群土器）を補完材料とした。この補完材料には、基礎資料に類似した須恵器坏が定量みられ、共伴した土師器坏（第47図22）にも、基本器形・製作技術に互換性のある個体が含まれる（第47図8・12）。

なお、2号窯跡の須恵器坏は口径／底径比の様子（第1表）から、4号窯跡のものより後出の可能性が考えられる。しかし、わずか4点の発掘資料が組成全体を反映している保証は無い



第47図 土器群の変遷



第48図 類例集成

ので、Ⅲ期のように前半・後半の区分はしない。

当該期の生産器種には、壺・高台壺・蓋・托・長頸瓶・こね鉢が確認される。製品様相は、Ⅰ期と大きく異なり、一定の断絶期間を挟んだことが窺える。

一新された当該期の壺は、主要類型のB II c・C II c類が拮抗し（4:3）、全体の76パーセントを占める状況がみられる。また、低比率ながら、Ba・B I b・B I c・Ca・C I c類を加えた多様な類型構成である点も、重要である（第46図）。全体でみると、Ⅰ期に対して、口径値が小さくなり（12~13cm台）、底部形態は平底に画一化している。また、底部切り離しは、回転糸切りが回転ヘラ切りを圧倒し（17:8）、無調整の比率が95%に達した。系譜は、金属器系「壺形」壺の方が優位である。

他の器種をみると、高台壺（第47図19）は、スケールアップした壺B I b類（同図9）を高台に乗せた器形を呈し、伴う蓋は、つぶれた宝珠形のつまみが付く。長頸瓶（同図17）は、頸部環状凸帯付タイプ（利部1998）がみられる。托（同図18）は1点のみであるが、口径23cmの大型品は、全国的にも稀と思われる。おそらく、寺院ないし在地有力豪族の特注品であろう。口縁部内面には、モデルの金属器を意識した、丁寧なヘラミガキが観察できる。他に、腹部下端付近に沈線が巡るこね鉢（同図23）がある。

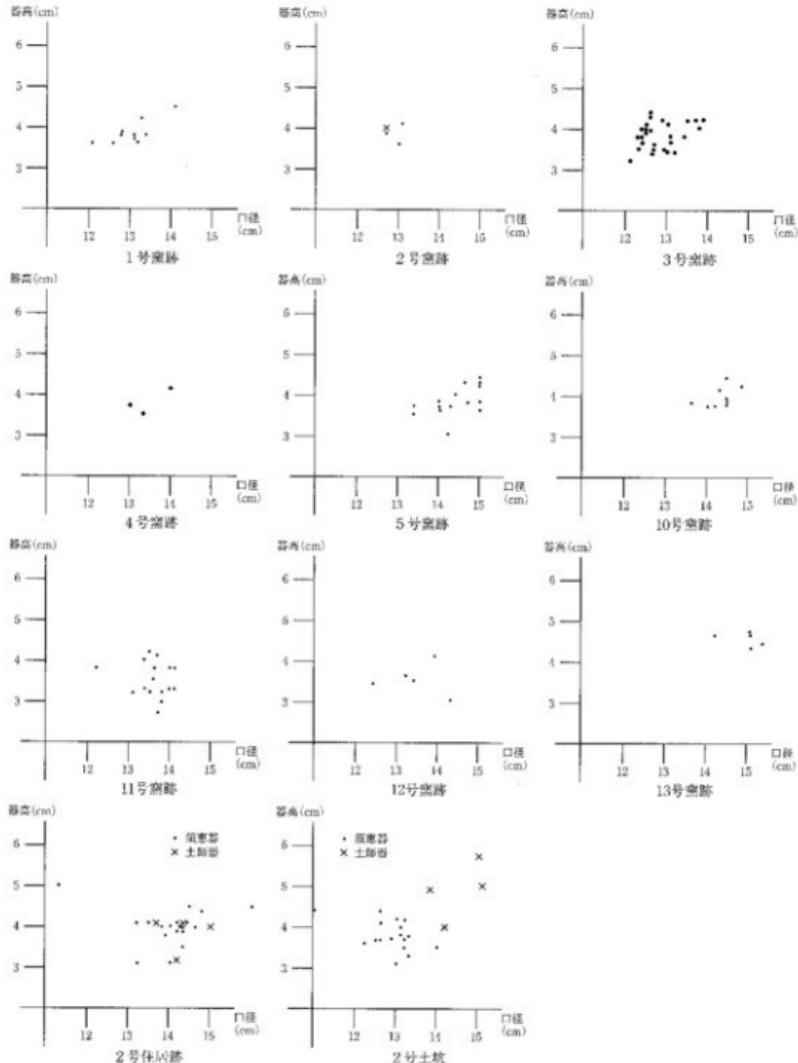
【Ⅲ期】当該期は、前半と後半に段階区分される。大枠を示すと、壺の主要類型変化は、B II c類の減少⇒C II c類の増加に現れる（2:7）。また、その他の類型もB I c・C I c類に減少し、系譜は主客逆転で、瓷器系「椀形」壺の方が優位となる（第46図）。さらに、製作技術では、回転糸切りの徹底、再調整の完全無調整化、内面仕上げの全面転換（ユビナデ調整→コテ当て調整）が認められる。高台壺・蓋のセットは、組成から脱落した。

前半：1・3号窯跡の出土資料を基礎とする（Ⅲ・Ⅳ C土器群）。生産器種には、壺・甕が確認される。壺は、まだⅡ期の製品に類似するものが定量混じる。甕は、器高50cm弱の丸底大型品である（同図28）。

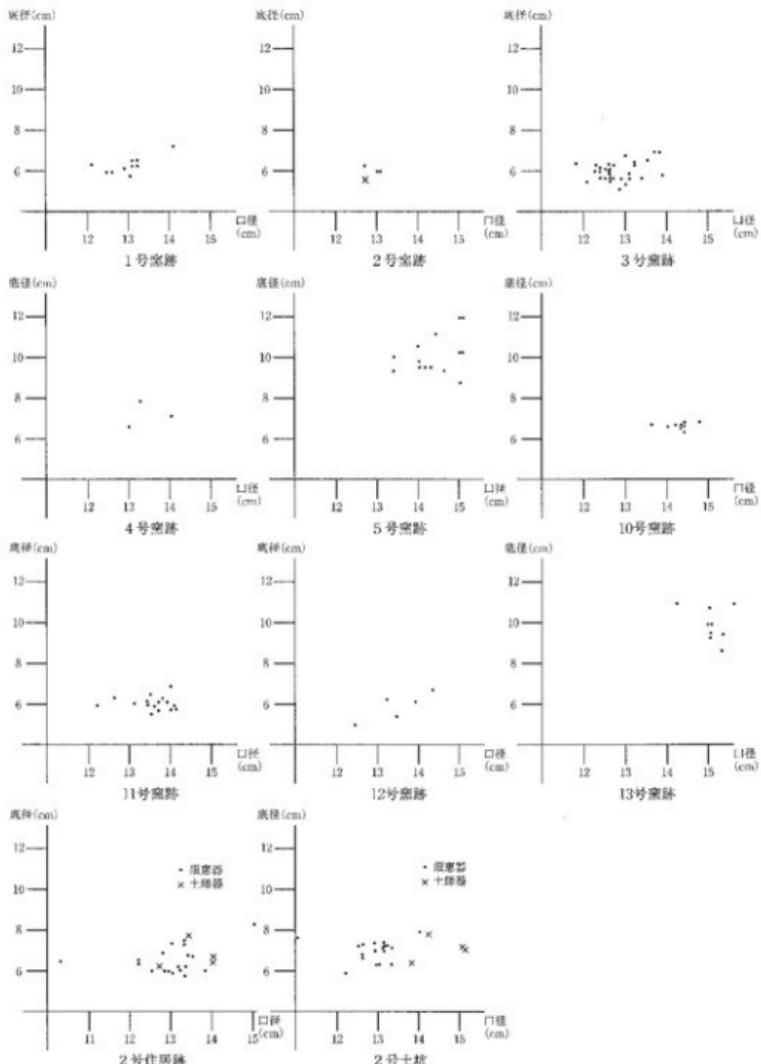
後半：10号窯跡の出土資料を基礎とする（Ⅳ C群土器）。生産器種には、壺・甕が確認される。壺は、器高/口径比が小さめに変化し始め、Ⅳ期につながっていく。甕は、器高30cm強の平底中型品で、口縁部上端が水平面をなす（同図29）。

【Ⅳ期】11・12号窯跡の出土資料を基礎とする（Ⅳ B・Ⅳ C土器群）。

生産器種には、壺・甕が確認される。壺の主要類型変化は、B II c類の減少⇒C II c類の増加がさらに進行し（1:8）、その他の類型は、C I c類だけが残る（第D図）。その結果、系譜は瓷器系「椀形」壺が圧倒的優位に立ち、器形は扁平に皿形化したものや、底径/口径比の著しく縮小したものが顕著となった。一方で、底部切り離し技術には窯ごとの個性が反映される。11号窯跡では、回転糸切りに画一化されるのに対し、12号窯跡では回転ヘラ切りが根強く



第49図 法量分析 (1)



第50図 法量分析 (2)

残る。壺は、器高50cm前後の大型品になると推定される（第42図1）。

以上をまとめると、壺の主要類型は、Ⅰ期がA1Ib・A2Ib類で構成され、Ⅱ～Ⅳ期は、BIIc類の減少⇒CIIc類の増加によって、漸移的に変化していくことが明らかとなった。つまり、土器様相はⅠ期とⅡ期の間に断絶があり、Ⅱ～Ⅳ期は連続的である。このことは、各期の年代的な相互関係を反映していると推測される。

4. 各期の実年代

では、具体的に実年代を検討したい。

(1) Ⅰ期

検討材料として、次の所見が認められる。

- a) : 壺1Ib類の類例は、8世紀初頭の窯跡・工人集落跡資料にみられ（第48図1・8）、いずれも組成で主体をなす状況が認められる。
 - b) : しかし、多賀城創建期の8世紀前半になると平底壺に驅逐され、ほとんど消滅してしまう。
 - c) : 上の事例のうち大蓮寺5号窯跡B群では、内面のカエリが消失した壺が確認され、セツトの高台壺にも、類例（同図4）がみられる。
 - d) : 壺A2Ib類の類例は、7世紀中葉～後半の窯跡・墳墓資料（同図5～7）→7世紀末葉～8世紀初頭の窯跡資料（同図2・11）等にみられ、法量・形態を変化させながら、継続的展開した様子が認められる^{註2)}。
- このうち、本遺跡の事例が該当するのは、後者である。また、高安C1号窯跡では、高台壺の類例も併焼されている（同図10）
- e) : しかし、8世紀前半以降の類例は、見当たらない。
 - f) : 口縁部内外面に波状文を巡らす壺の類例は、7世紀前半～中葉の集落跡資料（同図13・14）や、7世紀末～8世紀初頭の工人集落跡資料（同図12）にみられ、継続展開した様子が認められる。
 - g) : また、口縁部外面に波状文を巡らす瓶の類例は、直接見当たらないが、7世紀前半の窯跡資料や（同図16）、7世紀後半の墳墓資料で、胴部外面に列点刺突文・波状文を巡らす瓶類がみられ、類似現象と捉えられる（同図15）。
- g) : このような過剰な装飾を施す須恵器は、8世紀前半以降、皆無になる。

以上のことから、Ⅰ期の様相は、7世紀須恵器様式の最終段階に位置づけられ、8世紀初頭の実年代が与えられる。

ところで、Ⅰ期は本遺跡の須恵器生産開始期に位置づけられ、その背景には、刈田郡の建郡（養老五年：721年）との関係が想定される。つまり、本遺跡の所在する傑山寺丘陵上では、同

じ頃、別地点の兀山窯跡で刈田郡衙（大畠遺跡）創建期の正倉瓦が生産されており（佐々木・菊地1985）、郡衙跡の発掘資料中には、八幡坂1期の須恵器製品が確認される。^{註3)} こうした状況証拠から、本遺跡は郡衙整備に伴って、傑山寺丘陵上に複数設置された窯場の1つであった可能性が高い。

この仮説が正しいとすれば、I期の実年代は721年±数年のごく短期間に絞り込むことが可能で、須恵器編年研究の貴重な定点資料になると思われる。

また、この年代観は多賀城創建期にきわめて近く、8世紀初頭とはいえ、同前半との橋渡し的な位置づけとなる。多賀城創建期の最古窯（下伊場野窯跡）では、既に製品から7世紀的様相が払しょくされている（宮城県多賀城跡調査研究所1994）、国府整備を契機として、須恵器製品に大きな変化の起きたことが窺える。

（2）II期～IV期

検討材料として、次の所見が認められる。

- a) : II期の須恵器坏の類例は、天長9（832）年以降作成の漆紙文書（同図17）と共に伴った、多賀城跡資料（同図18）や、K-14窯式の灰釉陶器と共に伴った、集落跡資料などにみられる（仙台市南小泉遺跡22次調査9号住居跡）。さらに、上現は、9世紀初頭の集落跡資料（同図23・24）や、併行する伊治城跡後半期の資料まで遡ることができる。
- b) : 上の事例では、補完材料中の土師器坏の類例が共伴し、a) の年代観が補強される（同図19～22）。
- c) : III期の須恵器坏の類例は、多賀城IV-1期の窯跡資料（同図28～32）や、K-90窯式の灰釉陶器碗が共伴した、集落跡資料などにみられる（同図25～27）。
- d) : III期に顕在化した瓷器系「椀形」坏は、9世紀後半以降急増し、運動して、内面コテ当て調整が普及していくことが明らかにされている（仙台市教育委員会1987）。このことは、II期～III期の坏の系譜・製作技術変化と、a)～c) の年代観に矛盾しない。
- e) : IV期の須恵器坏の類例は、10世紀前半に降下した灰白色火山灰直後の窯跡資料（同図33～37）に、下限が求められる。ただ、古い様相を残す個体（第21図9・15）が含まれ、そこまで新しくなるとは考えにくい。

以上から、II期は9世紀初頭～中葉、III期は9世紀後半、IV期は9世紀末葉～10世紀初頭の実年代が与えられる。このうちII期は存続期間が他に比べて長く、本来は二分すべきと考えられる。しかし、十分な窯跡資料数に恵まれず、今後の増加を待つほかない。

5. 須恵器窯構造の変化

次に、これまでとは視点を変え、須恵器窯構造の変化をみていきたい。

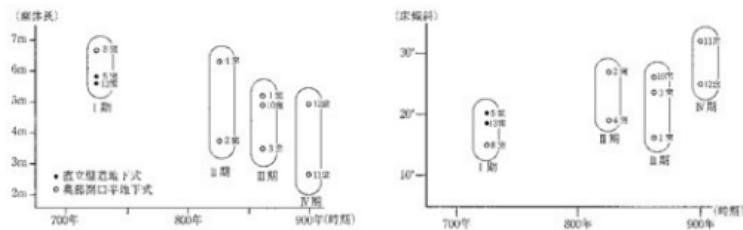
(1) 窯体構築方式

製品と同じように、I期とII期の間に断絶が横たわる。I期は地下式主体（地下式2：半地下式1）なのに対し、II期以降は、半地下式に統一されている（第53図）。この状況は、8世紀中葉を画期に、窯体構築方式が半地下式へ基本転換していく陸奥全体の動きに連動したものと言える（菅原2004・2009、桜井2009）。両者は排煙形態にも違いがみられ、地下式は直立煙道、半地下式は奥部開口型を備える。

ちなみにI期の半地下式窯は、平面形が短冊状をなす点で、8世紀前半（新）の日の出山窯跡群C地点4号窯跡に最も類似している（色麻町教育委員会1993）。

(2) 窯体長と床面傾斜

両者の相関関係には、次の2つの傾向性が指摘できる（第51・52図）。まず1つは、どの時期も、大型・緩傾斜の窯と、小型・急傾斜の窯に2分化していることで、秋田県横手市宮ヶ沢窯跡101・102号窯跡などの事例から（秋田県教育委員会1992）、主力製品が、前者は大型品（貯



第51・52図 窯の属性分析

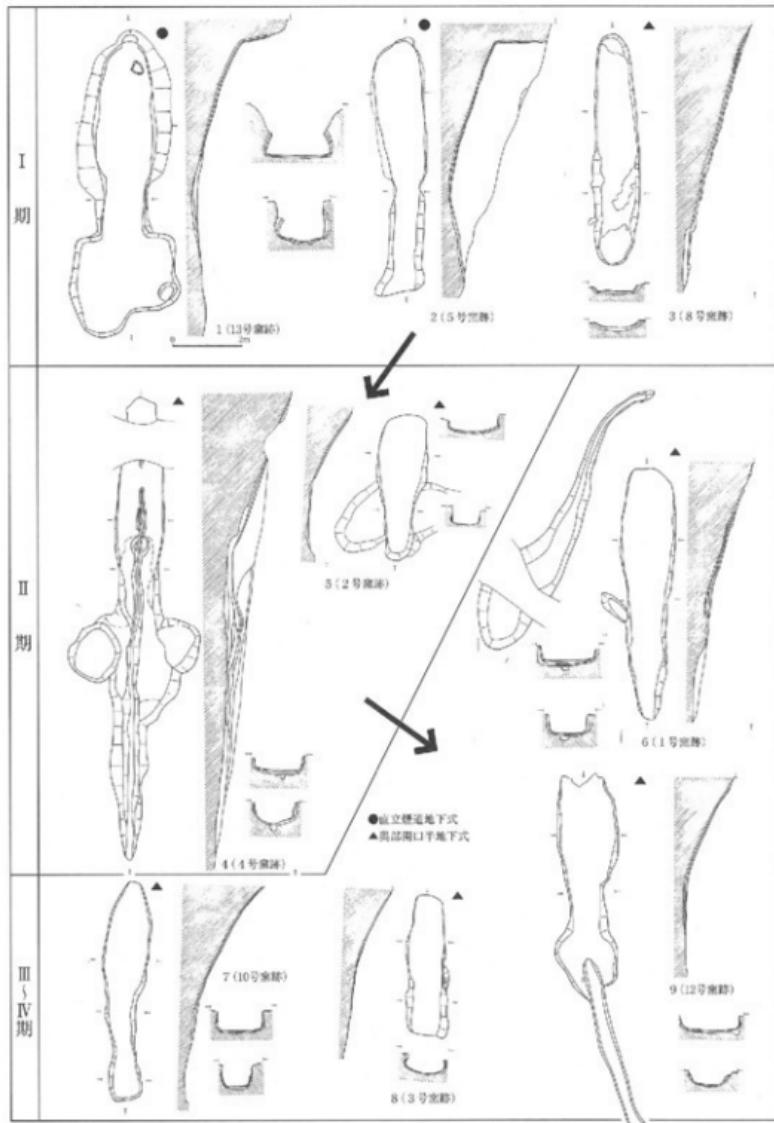
藏具）+小型品（食膳具）、後者は小型品（食膳具）に区別されていたと考えられる^{註10)}。

A : 大型・緩傾斜…8窯（I期）	4窯（II期）	1窓（III期）	12窓（IV期）
B : 小型・急傾斜…5・13窓（I期）	2窓（II期）	3・10窓（III期）	11窓（IV期）

ただし、AでもI期の13号窯跡は、大堀焼成窯特有の幅広な形態を有し（藤原1998b）、これも例外ではないと思われる。

もう1つは全体の動きとして、時間が新しくなるほど、窯体長が短くなる一方、床面が急傾斜していく傾向性である。これは「窯体内部の温度が均一で、蓄熱性の高い窯」→「火前・火奥の温度差が激しく、冷めやすい窯」の変化を意味し（藤原1998b）、IV期には、窯尻側に製品配置される壺が、土師器と区別できないほど軟質化してしまう。

以上の2つが、1つの窯場内でこれほど明確に捉えられたのは、本遺跡が陸奥初例と思われる。それが、どこまで普遍化していたのかは今後の課題であるが、1つの生産地操業モデルを提供した重要な成果であることは間違いない。



第53図 窩の変遷

6. 窯場景観の変化

須恵器生産関連の考察の最後として、窯場景観の変化を概観しておく。

(1) 丘陵全体の景観

傑山寺丘陵上には、広範囲に窯跡群が形成されていたと推定される。本遺跡と兀山窯跡の中間位置にあたる前山遺跡では、兀山窯跡と別種類の平瓦および須恵器転用焼き台（写真図版13の7）が採集され、窯跡1基の確認情報がある（白石市史編さん委員会1976、佐々木・菊池1985）。

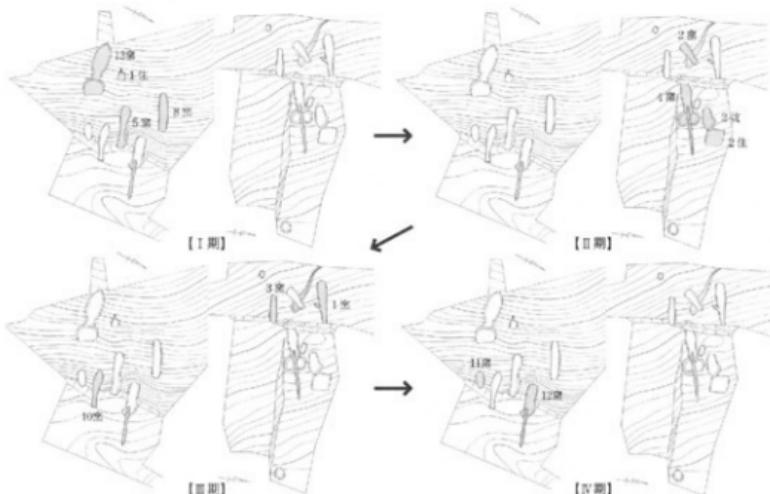
こうしたことから、現在の白石城跡や白石高校一帯にも窯が分布し、未確認の8世紀前半～末葉を含めて、継続的な生産が行われていた可能性が考えられる。白石盆地には、他の確実な古代窯跡は発見されず、ここが、地域中核窯の役割を果たしたと思われる。

(2) 窯の移動と回帰

本遺跡では、北集中区と南集中区で、交互に窯の移動と回帰が繰り返されている（第1図）。とくにⅡ～Ⅳ期は、それが継続変遷の中で捉えられ、森林資源の計画的利用が背景に推測される（藤原1998a）。

(3) 2基並列の配置

Ⅲ期とⅣ期には、前述したA：大型・緩傾斜の窯と、B：小型・急傾斜の窯が、2基並列の位置関係で認められる（1・3号窯跡、11・12号窯跡）。類例は、秋田県横手市富ヶ沢101・



第54図 窯の移動と回帰

102号窯跡などにみられ、須恵器窯の1つの配置パターンであったと考えられる。

(4) その他の遺構

本遺跡は、現地説明会資料に「焼土遺構が発見された」と記述されており、4～6号土坑が土師器焼成坑B類に該当する可能性がある（皆原1997）。そうすると、本遺跡の須恵器生産には、小規模な土師器生産が併設されていたのかも知れない。

また、性格は特定できないが、土器埋設遺構も窯場操業期間の所産と考えられる。

(5) 古代以外の遺物

古代以外の遺物としては石鎚があり、縄文時代と考えられる。近世以降のものとしては、陶磁器があり一覧表に掲載した。鉄砲玉があり、陣屋跡に関連するものと考えられる。また、時期が特定できない石製品が出上している。

第6章　まとめ

- 八幡坂遺跡は、白石市中心部の西側の丘陵上に立地する。発掘調査により須恵器窯跡12基、竪穴住居跡2棟、土坑5基、土器埋設遺構1基が発見された。
- 出土した須恵器は共伴関係、型式学的な特徴からI～V群に分けることができる。さらに遺構の重複関係を踏まえ、I期～IV期の設定が可能である。
- I期は養老五年（721年）前後の8世紀初頭、II期は9世紀初めから中葉、III期は9世紀後半、IV期は9世紀末～10世紀初めの年代と推定される。
- 窯の構造は、I期は地下式が主体で、II期以降は半地下式のみとなる。
- 八幡坂遺跡から発見された窯跡は、古代刈田郡における最大の窯跡であり、I期の製品は刈田郡衙と考えられている大畠遺跡に供給されている。
- 慶長5年（1600）の伊達政宗による上杉領白石城攻めの陣屋跡に関連すると推定される鉄砲玉が発見された。

【註】

- 「考察」で示された、小川淳一氏のすぐれた分析成果による。
- 古い段階は陶器窯、新しい段階は在地土師器窯に、系譜を求める見解がある（菊地1994）。確かに正しいと思われるが、排他的関係ではなく、陶器窯出自の窯が継続展開していく過程で在地の影響を受けたと考えられる。
- 平成3年度白石市教育委員会の発掘調査資料中で、実見した。ただし、未整理のため、瓦との確実な共伴関係は確認できていない。したがって、都構に先行した造形に伴う可能性もあり、その場合、この前提は崩れてしまう。ただ、蓋の内面のカエリが消失している点から、7世紀末まで遡るとは考えられず、最大でも20年を越えるタイムラグは生じない。資料の公表と併せて、今後の課題となる。
- 相対的に掘り込みが浅い半地下式は、大半の窯尻が欠損していた（第4章参照）。そのため、第51図に示した窯体長は、あくまでも遺存値である。しかし、調査状況の写真を見ると、地表面がさほど削平を受けた様子はなく、周辺地下式窯の焼造高からみても、本来の平面形は概ね保たれていると考えられる。したがって、2タイプの関係は、信頼が置けると判断した。

【引用・参考文献】

- 片倉信光 1965 「白石城址調査報告書」 白石市文化財調査報告書第4号
- 涌谷町教育委員会 1974 「長根窯跡群Ⅱ」
- 国見町教育委員会 1974 「大木戸窯跡群発掘調査報告」「国見町の文化財」
- 東北学院大学考古学研究部 1975 「鳥屋三角田南地区窯跡発掘調査報告」「温故」第9号
- 涌谷町教育委員会 1976 「長根窯跡群Ⅲ」
- 白石市史編さん委員会 1976 「白石市史別巻 考古資料編」
- 宮城県教育委員会 1981 「東山遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書V」
- 宮城県教育委員会 1983 「朽木横穴古墳群 宮前遺跡」
- 佐々木和博・菊地逸夫 1985 「白石市兀山遺跡の古丸」「赤い本 片倉信光氏追悼論文集」赤い本同人会
- 西 弘謙 1986 「土器様式の成立とその背景」 真陽社
- 白石市教育委員会 1987 「八幡坂道路 - 現地説明会資料-」
- 宮城県教育委員会 1987 「覗沢・大沢窯跡ほか」
- 仙台市教育委員会 1987 「五本松窯跡」
- (財)福島県文化センター 1989 「善光寺遺跡」「国道113号線バイパス遺跡調査報告」IV
- 仙台市教育委員会 1990 「大年寺横穴墓」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1991 「第60次調査」「多賀城跡調査研究所年報1991」
- 秋田県教育委員会 1992 「富ヶ沢A・B・C窯跡」「秋田ふるさと村建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査」
- 河南町教育委員会 1993 「須江窯跡群岡ノ入遺跡」
- 仙台市教育委員会 1993 「大連寺窯跡 - 第2・3次-」
- 色麻町教育委員会 1993 「日の出山窯跡群」
- 根島市教育委員会 1993 「大鳥城跡」
- 小川淳一 1994 「第二編 原始・古代 第二章 古代」「藏王町史」道史編
- 菊地佳子 1994 「多賀城創建以前の陸奥国と須恵器」「歴史」第82輯 東北史学会
- 仙台市教育委員会 1994 「南小泉遺跡第22・23次発掘調査報告書」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994 「下伊湯野窯跡群」
- 柳澤和明 1994 「東北の施釉陶器 - 陸奥を中心にして」「古代の土器研究 第3回シンポジウム施釉陶器」古代の土器研究会
- (財)福島県文化センター 1995 「正直C遺跡V地点」「世塙地区遺跡発掘調査報告36」
- 佐藤敏行 1995 「須江窯跡群の窯構造について」「石巻文化センター調査研究報告」第三号
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」「福島考古」第36号
- 菅原祥夫 1997 「東北東部 - 古代陸奥の上師器生産体制と土師器焼成坑」「古代の土師器生産と焼成遺構」窯跡研究会編 真陽社

- 福島市教育委員会 1997 「城裏口遺跡」
- 利浦 修 1998 「東北以北の双耳坏と環状凸帯付長頸瓶」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号
- 藤原 学 1998 a 「燃料材と薪」『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』
- 藤原 学 1998 b 「須恵器窯構造と系譜」『須恵器窯の技術と系譜－豊科、信州、そして日本列島』窯跡研究会
- いわき市教育委員会 1999 「五反田A遺跡」
- 相原淳一 2000 「福岡長袋の分布調査」『白石市文化財愛護友の会会報』第22号
- 舟美俊典 2001 「多賀城周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究 穂式制の土器様式』
- いわき市教育委員会 2003 「梅ノ作瓦窯跡群」
- 菅原祥次 2004 「東北地域における古代後半期須恵器窯構造」『須恵器窯の技術と系譜2』窯跡研究会
- 菅原祥次・佐藤敏行 2001 「陸奥中・南部の須恵器窯」『須恵器窯構造資料集2－8世紀中葉から12世紀を中心として』窯跡研究会
- 望月精司 2004 「須恵器窯構造に関する構造名称や部位名称及びその機能」『須恵器窯構造資料集2－8世紀 中葉から12世紀を中心として』窯跡研究会
- 東北芸術工科大学考古学研究室 2007 「高安窯跡群C地点1次発掘調査報告」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2007 「木戸窯跡群Ⅲ」
- 桜井友梓 2009 「多賀城周辺の須恵器窯構造」『宮城考古学』第11号
- 菅原祥次 2009 「東北」「古代窯業の基礎研究」窯跡研究会編 真陽社

第2表 出土陶磁器一覧

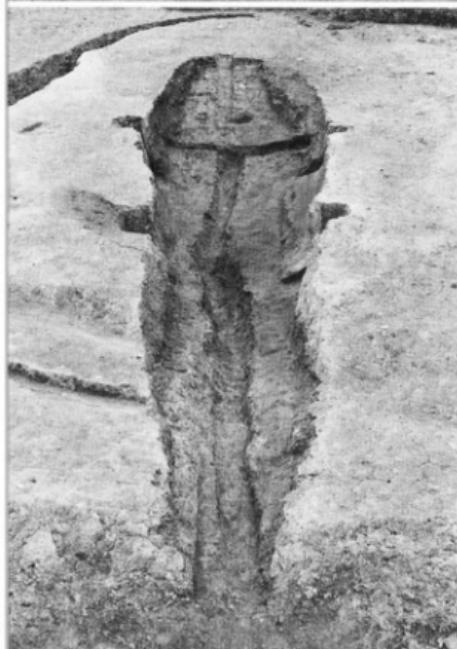
番号	出土地区、層位	種別	特徴、年代	点数	写真図版
1	A124. 1層	小明	瀬戸、内外面鉄輪		
2	B-20. 1~2層	小明	近代の大堀掛馬か、外面は灰釉、内面は白釉		
3	B-19. 2層	染付楕	瀬戸美濃、刷絵、19世紀後半		
4	A924. 2層	小环か	猪口、地方窓		
5	B S32. 1層	輪花楕	乾ノ目四瓣台、刷絵、明治後半、地方窓、口縁部直径14.5cm、底部直径7.2cm		
6	B S22. 1層		堤焼		
7	B S22. 1層	青平楕	直受け、灰釉、幕末、地方窓		
8	B S22		灰釉、象眼	13-5-1	
9	B S33. 2層		末家?		
10	B-63. 2層	鉢?	焼成不良、地方窓		
11	B-9. 1~2層	鉢か皿	瀬戸美濃、鉄輪、近世		
12	2層	急須	常滑、近現代		
13	不明	楕	肥前染付楕、四方ダスキ、小型、18世紀代		
14	B S-1. 2層	楕	鉄輪、窓不明		
15	B S33. 1層	鍋の蓋	大堀垂馬か、幕末明治期		
16	1号説壁認画、埋土上層	盛利	肥前染付、江戸時代		
17	B S33. 1層		末家?	2点	
18	B-19. 2層、B-9. 3層、 底構面、B S22. 1層		不明	3点	
19	B S14. 埋土XX		小明	2点	
20	A-23. 2層	楕	刷絵、糞付、地方窓、明治		
21	A-24. 1層	縦り鉢	末家?		
22	B-11. 1~2層		末家? 深楕に墨跡流し、近代		
23	B-11. 1~2層		堤焼、なまこ楕、19世紀中頃		
24	B N-3. 1層	小型楕	瀬戸美濃? 近世か近代		
25	B S22. 1層	楕	肥前染付楕、高台がやや大型、見込みに開窓、火共宝珠文、高台内は「豪傑に文字文」、18世紀代		
26	B S-3. 2層	皿か鉢	あけ楕、削り出し高台、近世		
27	B-1. 1~2層		灰釉、窓地時期不明		
28	B S-1. 2層、B S 1~4、 埋土XX	盛利?	肥前、帆掛け船か風景文、植物、19世紀前半か	6点	
29	A-19. 2層	瓶の肩部分	筑窯、地方窓		
30	A-19. 2層	鉢	堤焼、なまこ楕、明治		
31			プリント印刷を含む明治半ば以降	13点	
32	B S3-1	小型楕	末家?	2点	
33	B S3-1	戸車	明治時代、直径33cm、孔の直径1.1cm		
34	B S3-1. 1層		近現代	22点	
35	B S3-2. 1層		近現代	4点	
36	B-20. 1~2層ほか		近現代	9点	
37	B S3-3. 1層ほか		近現代	11点	

報告書抄録

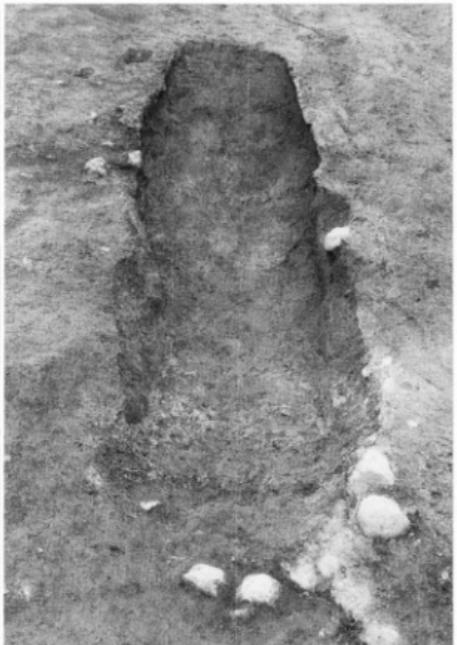
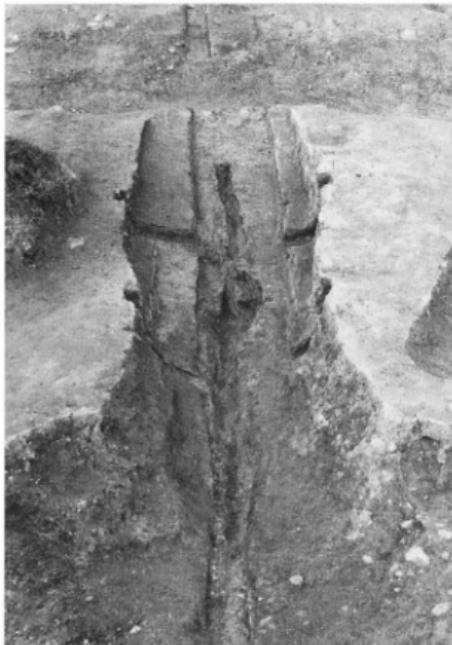
ふりがな	はちまんざかいせきはかはくつちょうさほうこくしょ						
書名	八幡坂遺跡ほか発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	白石市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第31集						
編著者名	青原祥夫、清野俊太朗、日下和寿						
編集機関	白石市教育委員会						
所在地	〒989-0206 宮城県白石市寺屋敷前25番地6 TEL: 0224 (22) 1343						
発行年月日	西暦2009年8月20日						
ふりがな 所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 道跡番号	東経	調査期間	発掘面積 m ²	調査原因
はちまんざかいせき 八幡坂遺跡	白石市大平森合字 八幡坂	04206	02442	37° 59' 47"	140° 36' 55"	19870224～ 19870329、 19870824～ 19871003	
はちまんざかいせき 八幡坂西 じんやあと 陣屋跡	白石市大平森合字 八幡坂	04206	02249	37° 59' 46"	140° 36' 48"	19870224～ 19870329	801.00 地地区画整 理事業
はちまんざかいせき 八幡坂西 いせき 遺跡	白石市大平森合字 八幡坂	04206	02345	37° 59' 46"	140° 36' 48"	19870224～ 19870329	
まとうせいせき 前山遺跡	白石市大平森合字 八幡坂	04206	02115	37° 59' 40"	140° 36' 55"	19870224～ 19870329	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
八幡坂遺跡	窯跡	古代	須恵器窯跡12基、 堅穴住居跡2棟、 土坑5基、 土器埋設遺構1基	須恵器、上師器、 石器、鐵砲玉、 砥石、 近世近代陶磁器	古代の刈田郡における須 恵器生産拠点跡の発掘調 査である。		
八幡坂西陣 屋跡、八幡 坂西遺跡	陣屋跡、散 布地	古代、近 世	なし	なし	八幡坂遺跡の鐵砲玉は伊 達政宗による白石城攻め に関連する遺物と考えら れる。		
前山遺跡	窯跡	古代	なし	なし	なし		
要約	八幡坂遺跡では、8世紀初頭から10世紀初めまでの須恵器窯跡が12基発掘された。						



写真図版 1 上 調査区北側
下 調査区南側



写真図版2
上 1・2号窯跡
右 第2号窯跡
左 第1号窯跡



写真図版3 上左 第4号墓跡
下左 第8号墓跡 上右 第3号墓跡
下右 第5号墓跡

第7・8号窯跡（7号は痕跡）



第11号窯跡

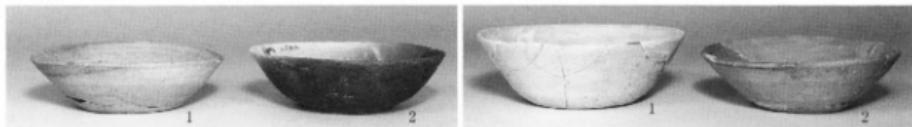


第13号窯跡





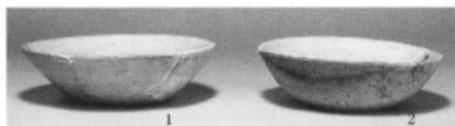
上右 第10号窯跡
上左 第12号窯跡
中右 第1号窯跡
中左 カメ塚墓
下 第2号住居跡



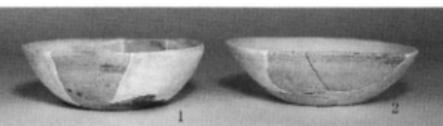
1. 1号窯跡出土遺物 (1)



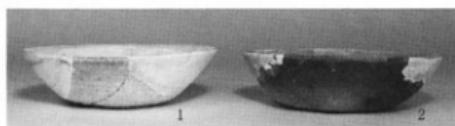
2. 1号窯跡出土遺物 (2)



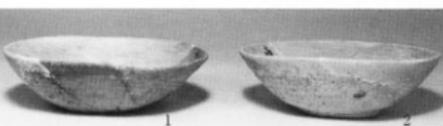
3. 1号窯跡出土遺物 (3)



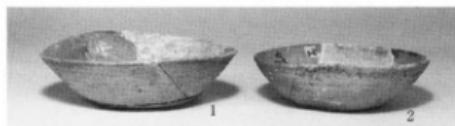
4. 2号窯跡出土遺物 (1)



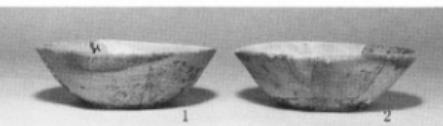
5. 2号窯跡出土遺物 (2)・2号住居跡出土遺物



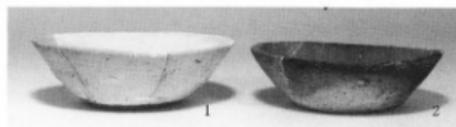
6. 3号窯跡出土遺物 (1)



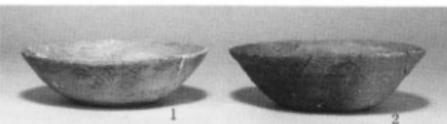
7. 3号窯跡出土遺物 (2)



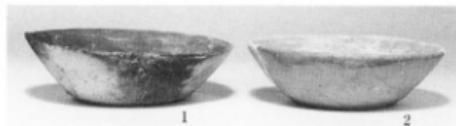
8. 3号窯跡出土遺物 (3)



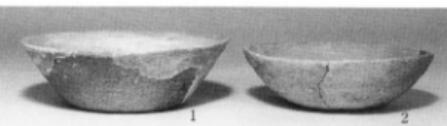
1. 3号窑跡出土遺物 (4)



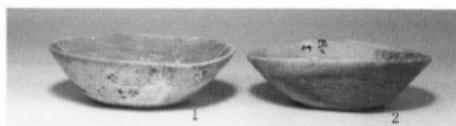
2. 3号窑跡出土遺物 (5)



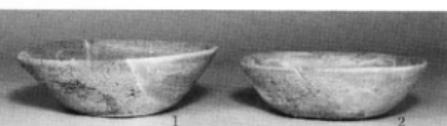
3. 3号窑跡出土遺物 (6)



4. 3号窑跡出土遺物 (7)



5. 3号窑跡出土遺物 (8)



6. 4号窑跡出土遺物



7. 5号窑跡出土遺物 (1)



8. 5号窑跡出土遺物 (2)



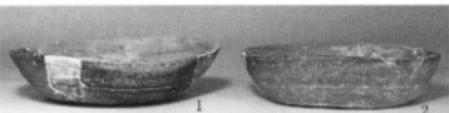
1. 5号窯跡出土遺物 (3)



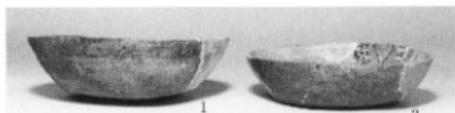
2. 5号窯跡出土遺物 (4)



3. 5号窯跡出土遺物 (5)



4. 5号窯跡出土遺物 (6)



5. 5号窯跡出土遺物 (7)



6. 5号窯跡出土遺物 (8)



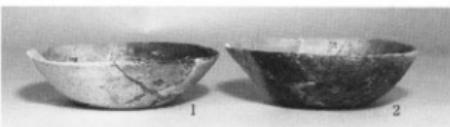
7. 8号窯跡出土遺物



8. 9号窯跡出土遺物



1. 10号窯跡出土遺物 (1)



2. 10号窯跡出土遺物 (2)



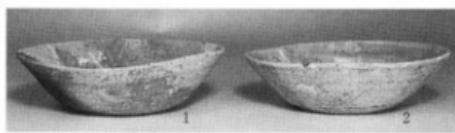
4. 10号窯跡出土遺物 (4)



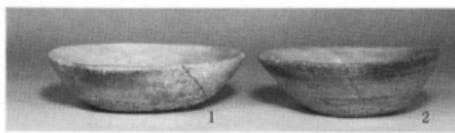
3. 10号窯跡出土遺物 (3)



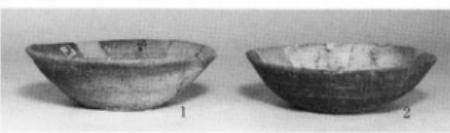
6. 11号窯跡出土遺物 (1)



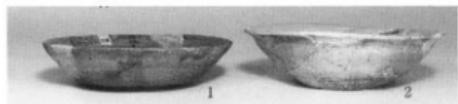
5. 10号窯跡出土遺物 (5)



7. 11号窯跡出土遺物 (2)・3号窯跡出土遺物



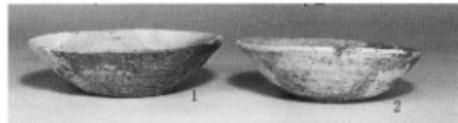
8. 11号窯跡出土遺物 (3)



1. 11号窯跡出土遺物 (4)



2. 11号窯跡出土遺物 (5)



3. 12号窯跡出土遺物



4. 13号窯跡出土遺物 (1)



5. 13号窯跡出土遺物 (2)



6. 13号窯跡出土遺物 (3)



7. 13号窯跡出土遺物 (4) (13-4、13-10)



8. 2号住居跡出土遺物 (1)



1. 2号住居跡出土遺物 (2)



2. 2号住居跡出土遺物 (3)



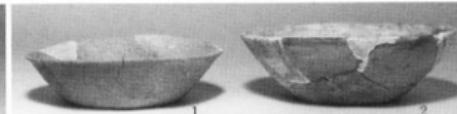
3. 2号住居跡出土遺物 (4)



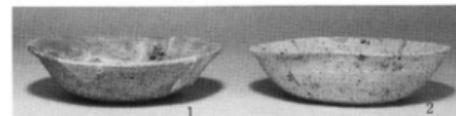
4. 2号住居跡出土遺物 (5)



5. 2号土坑出土遺物 (1)



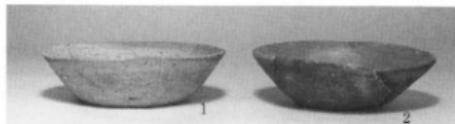
6. 2号土坑出土遺物 (2)



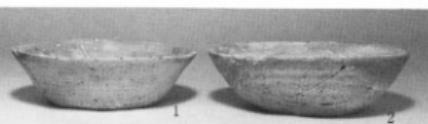
7. 2号土坑出土遺物 (3)



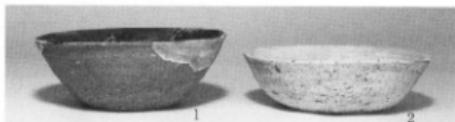
8. 2号土坑出土遺物 (4)



1. 2号土坑出土遗物 (5)



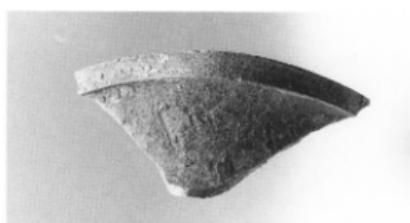
2. 2号土坑出土遗物 (6)



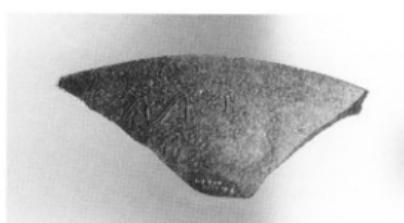
3. 2号土坑出土遗物 (7)



4. 2号住居跡出土遗物 (6)



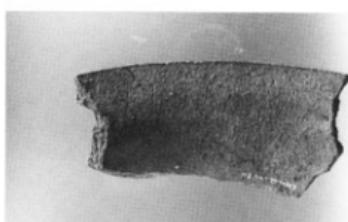
5. 5号窯跡出土遗物 (外面)



6. 同左 (内面)



7. 5号窯跡出土遗物 (外面)



8. 同左 (内面)

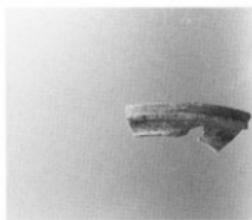
写真図版12



1. 1号窯跡出土遺物（外面）（第43図4）



2. 1号窯跡出土遺物（内面）と円面鏡（第44図2）



3. 北区調査区東側出土遺物（第42図4）



4. 須恵器片（BS-1、3層出土）と粘土塊（竪穴出土）



5. 石鏃、鉄砲玉、陶磁器



6. 5号窯出土 須恵器が溶着した礫焼台



7. 前山遺跡出土 須恵器が溶着した礫焼石

写真図版13

白石市文化財調査報告書 第34集

八幡坂遺跡ほか発掘調査報告書

平成21年8月17日印刷

平成21年8月20日発行

編集・発行 白石市城南第二土地区画整理組合
白石市教育委員会

〒989-0206 宮城県白石市字寺屋敷前25番地6
電話: 0224 (22) 1343

印 刷 株式会社東北プリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24
電話: 022 (263) 1166

